

土佐日記讀本附註解

緒言

此の日記は、歌文に名高き紀貫之の筆に成れり。貫之は、醍醐天皇の朝に仕へ、古今和歌集の撰者、和歌の中興を以て名ある人なるのみならず、漢文のみ盛にして、今日のいはゆる雅文と稱するものあらざりし時代に當り、大に國文の美を唱道して、自ら、その文の上に、一機軸を出だして、一世を風靡したる人なり。土佐日記は、貫之が、延長八年に、土佐の國守となりて、彼の國に赴任し、承平四年に、任滿ちて京に上れる時の紀行文なり。

古今集の序、大井川の行幸の序、共に綺麗典雅ならざるにあらず。又、流暢ならざるにあらず。されど、その文は、浮華の嫌な
しとせず。しかるに、此の日記の最も長ずる處は、簡潔疎璞の
中に、能く言はむと欲する所を言ひ得て、文章上に、痛心經營
の痕跡をこぼめざるにあり。香川景樹も文章の簡雅なる、意
味の立微なる、かへりて古今集の序の上に出で、最も、天下の
冠たるへしといへり。すべて、此の日記の文、いたづらに看過
せば、さまざまにもあらぬやうなれども、深く味ふ時は、言毎に
意を含めて、上下の照應、前後の對應、甚巧にして、其の文思の
富贍なること、實に賞歎すべきものあり。
此の日記の叙筆は、貫之が最愛の女子をうしなひて、悲に堪

へざること、船中風波のさはり多く、海賊のおそれある状
を、同船したる従者の女が滑稽まじりにかきたるやうに
しるせり。其の故は、貫之自身の作とししては、かゝる事をかゝ
んは、あまりなるわざにて、さては悲哀の情をやるにも不便
なればなり。この書を読むものは、まづその意を忘るまじき
ことなり

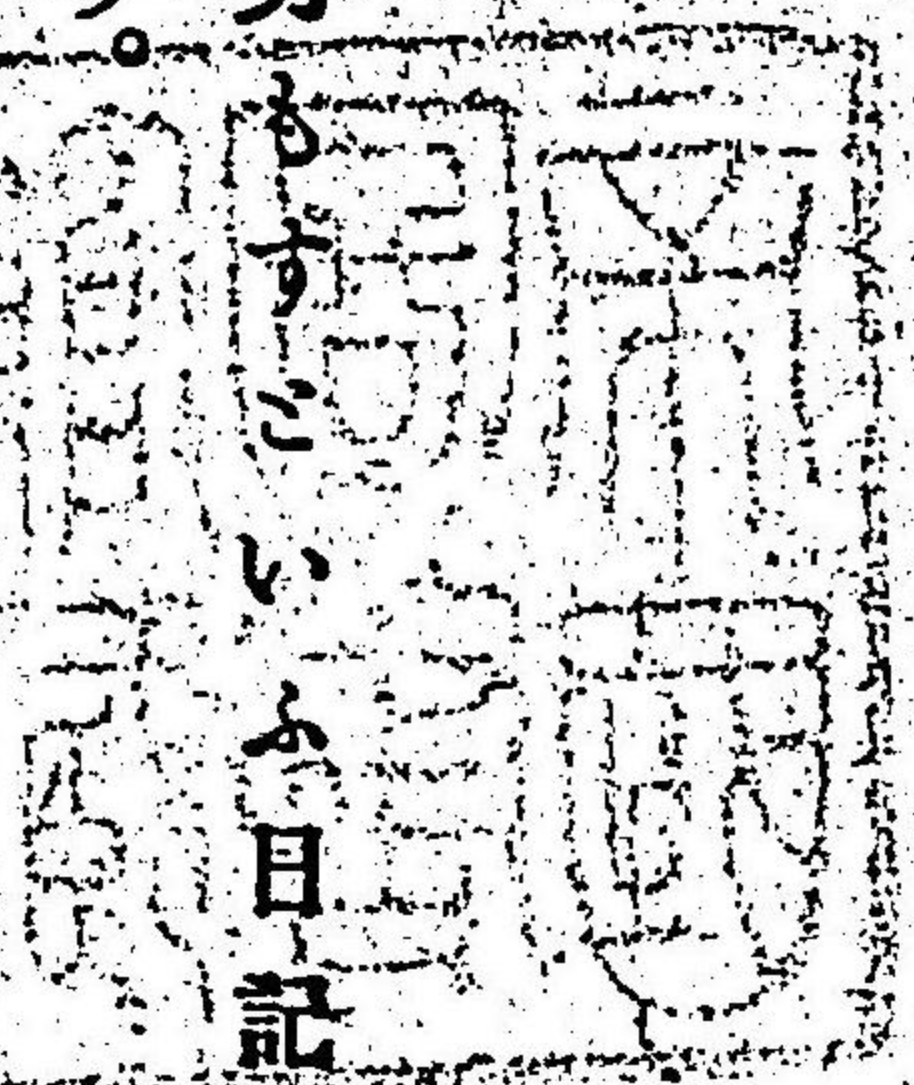
明治四十二年三月

篠田真道識

土佐日記讀本 附註解

紀貫之著
篠田眞道述

男もすこいふ日記といふものを、女も、してみむとて、するなり。



その年の師走の二十日あまり、ひこ日の日の、戌の時に、門出す。そのよし、いさゝか、物に書き付く。

ある人、縣の四こせ五こせ果て、例の事ども、皆しをへて、解由なご取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へわたる。彼れ此れ、知る、知らぬ、送りす。年ごろ、能く具しつる。人々なむ、別れ難く思ひて、しきりに、さかくしつゝ、のゝしる中に、夜ふ

けぬ。

廿二日。和泉の國まで、たひらかに、願ひ立つ。藤原の言實、船路なれど、うまの饑す。上、中、下、酔ひ過ぎて、いこあやしく、こほ海のほごりにて、あざれ合へり。

廿三日。八木の康教、こいふ人あり。この人國に必ずしも出でつかわるゝ人にもあらざりき。これぞ、正しきやうにて、うまのはなむけしたる。かみがらにやあらむ。國人の心の常こして、今はこて見えずなるを、心あるものは、はちずになむ來ける。是は、物によりて、ほむるにしもあらず。

廿四日。講師、うまの饑しに、いでませり。ありこある、上、下、わらはまで、酔ひしれて、ひこ文字をだに知らぬものしが、足は十文字に蹈みてぞ遊ぶ。

廿五日。かみの館より、呼びに、文もて、來れり。よばれていき、日ひこひ、夜ひこよ、こかく遊ぶやうにて、明けにけり。

廿六日。なほ、かみの館にあるに、あるじし、のゝしりて、をのこらまぞに、物かつけたり。からうた、聲あげて、いひけり。やまこうた、あるじも、まらうごも、こご人も、いひあへり。からうた、これには書かず。やまこうた、あるじのかみの、よめりける。

みやこ出で、君に逢はむこ、こしもこを、

こしかひもなく、別れぬるかな。

こなむありければ、歸るさきのかみのよめる。

しろたへの浪路を遠く、往きかひて、

我に似へきは、誰ならなくに。

こご人々のも、ありければ、さかしきも、なかるべし。こかくい

ひて、さきのかみも、今のも、もろごもに、おりて、さきのも、いま
のも手とり交して、酔ひ言に、心よげなることして、出でにけ
り。

廿七日。大津より、浦戸をさして、漕ぎ出づ。かくあるうちに、京
にて生れしをむなご、こゝにして、俄にうせにしかば、この頃
の出で立ち、いそぎを見れど、何事も、え言はず。京へ歸るに、を
むなごのなきのみぞ、悲み戀ふる。ある人々も、え堪へず。この
あひだに、ある人の、書きて、出せる歌。

みやこへご、思ふも物の、悲しきは、

かへらぬ人の、あればなりけり。

また、あるごきには、

あるものご、忘れつゝなほ、なき人を、

いづらご問ふぞ、悲しかりける。

こいひけるあひだに、鹿兒の崎といふ所に到るに、かみのは
らから、又、こご人これかれ、酒なごもて追ひきて、磯におりあ
て、別れがたきごをいふ。かみの館の人々の中に、このきた
る人々ぞ、心あるやうには、言はれほのめく。かく別れがたく
いひて、かの人々の口網も、もろ持ちにて、この海へにて、にな
ひ出せる歌。

をしご思ふ、人やごまるご、あし鴨の、

うちむれてこそ、我は來にけれ。

こいひてありければ、いごいたくめそ、往く人の、よめりけ
る。

棹させご、底ひも知らぬ、わたつみの、

ふかき心を君に見るかな。

さいふあひだに、楫取ものゝあはれも知らず、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむこて、潮みちぬ、風も吹きぬへしと、さわげば、舟に乗りなむこす。この折に、ある人々折ふしにつけて、からうたごも時に似つかはしきをいふ。またある人、西の國なれど、甲斐歌など謠ふ。かくうたふに、ふなやかたの塵も散り、空ゆく雲も、たゞよひぬごぞ、いふなる。こよひ浦戸に、こまる。藤原の言實、橘の季衡、こご人々、追ひ來たり。

廿八日。浦戸より漕ぎ出でて、大湊を追ふ。このあひだに、はやくのかみの子、山口の千岑、酒よき物ごも、もてきて、船に入れたり。行くくゝ飲み食ふ。

廿九日。大湊に、こまれり。くすし、ふりはへて、屠蘇、白散、酒加へ

てもて來たり。志あるに似たり。

ついたち、なほ、おなじこまりなり。白散を、あるもの、夜のまこて、ふなやかたに、挿しはさめりければ、風に吹きならさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。芋も、あらめも、齒がためもなし。かうやうの物も、なき國なり。もこめしもおかず。たゞ押鮎の口をのみぞ吸ふ。この吸ふ人々の口を、押鮎もし、思ふやうあらむや。けふは、みやこのみぞ、おもひやらるゝ。こゝのへの門の、しりくめ繩の、なよしのかしら、ひゝら木ら、いかにこぞいひあへる。

二日。なほ、大湊に、こまれり。講師、物、酒、おこせたり。

三日。おなじ所なり。もし、風波の、しばしと、惜むこゝろやあらむ。こゝろもこなし。

四日。風ふけば、え出でたゝず。昌連酒、よきもの、たいまつれり。かうやうのもの、もてくる人になほしもえあらで、いさゝけわさせさす物もなし。にぎはゝしきやうなれど、まくることあす。

五日。風波やまねば、猶おなじところにあり。人々たえず、ごぶらひにく。

六日。きのふのごとし。

七日になりぬ。おなじ湊にあり。けふは、青馬を思へど、いさかひなし。だゞ、波の、白きのみぞ見ゆる。かゝるあひだに、人の家の、池ご名あるところより、鯉はなくて、鮒より始めて、川のも、海のも、ごごものも、長櫃に擔ひつゞけて、おこせたり。若菜、籠に入れて、雉なご、花につけたり。若菜ぞ、けふを知らせたる。歌

あり。その歌。

浅茅生の野へにしあれば、水もなき、

池につみつる、若菜なりけり。

いさ、をかしかし。この池ごいふは、所の名なり。よき人の、男につきて、下りて、住みけるなりけり。この長櫃のものは、みな人、わらはままでに、くれたれば、飽きみちて、舟子ごものは、腹鼓をうちて、海をさへ駕かして、波をも、たてつべし。かくて、このあひだに、事多かり。けふ、破籠もたせて、來たる人、その名なごぞや。今思ひ出でむ。この人歌よまむご、思ふ心ありてなりけり。ごかくいひくゝて、波のたつなることゝ、憂へ言ひて、よめるうた。

ゆくさきに、たつ白波の、聲よりも、

おくれてなかむ我やまさらむ。

ごぞよめる。いと大ごゑなるべし。もてきたるものよりは歌
はいかゝあらむ。この歌をこれかれあはれがれごも、ひこり
も返しせず。しつべき人もまじれ、ご、これをのみ、いたがり、
ものをのみ食ひて、夜ふけぬ。この歌ぬし、又まからずといひ
て立ちぬ。ある人の子の、わらはなる、ひそかに言ふ。まろ、この
歌の返しせむといふ。おごろきて、いとをかじきことかな。よ
みてむやは。よみつべくば、はや言へかしといふに、まからず
といひて、立ちぬる人を待ちて、よまむごて、もごめけるを、夜
ふけぬごにや、あらむ、やがていにけり。そもく、いかゝよみ
たるご、いぶかしがりて問ふ。このわらは、さすがに耻ぢてい
はず。強ひて問へば、いへる歌。

ゆく人も、ごまるも、袖のなみだ川、

みぎはのみこそ、ぬれまさりけれ。

こなむよめる。かくはいふものが。うつくしければにやあら
む、いとおもはずなり。わらは言にては、何かはせむ。おむな、お
きなにを、若つべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあら
ば、やらむごて、おかれぬめり。

八日。さはることありて、なほ、おなじ所なり。こよひの月は、海
にぞ入る。これを見て、業平の君の、山の端にげて入れずもあ
らなむといふ歌なむ、おぼゆる。もし、海へにてよま、ししかば、
波たちさへて、入れずもあらなむご、よみてましや。今、この歌
を思ひ出でて、ある人のよめりける。

てる月の、ながるゝ見れば、天の川、

年か一冊三十一

こや。いづるみなこは海にざりける。

九日。つごめて、大湊より、那波のこまりを追はむこて、漕ぎ出でけり。これかれ、たかひに、國のさかひの内はこて、見送りに來る人、あまたが中に、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政らなむ、御館より出でたまひし日より、こゝかしこに追來る。この人々ぞ、志ある人なりゆゑ。人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむこてぞ、この人ごもは、追ひきける。かくて、漕ぎゆくまに、海に、海に、ほごりに、留る人も遠くなりぬ。船の人も、見えずなりぬ。岸にも言ふことあるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。かゝれど、この歌を、ひごり言にして、やみぬ。

思ひやる、心は海を、わたれども、

ふみしなれば、知らずやあるらむ。

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の數、いくそばく、いく千とせ、經たりと知らず。もごごに、浪うちよせ、枝ごごに、鶴ぞごびかふ。おもしろしと見るに、たへずして、船人のよめる歌。

みわたせは、松のうれごごに、すむ鶴は、

千代のごちごぞおもふへらなる。

こや。この歌は、所を見るに、えまさらず。かくあるを見つゝ、漕ぎ行くまに、まに、山も海もみな暮れ、夜ふけて、にし東も見えずして、てけのこご、楫取の心に任せつ。男もならはぬは、いと心細し。まして女は船底に、かしらをつきあて、ねをのみぞ

泣く。かく思へど、船子、楫取は、船歌うたひて、なにとも思へらず。その謠ふ歌は、

春の野にてぞ、ねをば泣く。わかすよきに、手をさるさる、摘むだる菜を、親やまほるらむ。しうごめや食ふらむかへらや。

よんへのうなるもがな。せに乞はむ。よんへの菜を、そらごををして、おきのりわざをして、せにも持てこず。おのれだにこず。

これならず、多かれど、書かず。これらを、人の笑ふを聞きて、海は、荒るれど、心は少し和ぎぬ。かく行き暮して、ごまりにいたりて、おきな人ひこり、たうめひこり、あるが中に、心地あしくて、物もものし給はで、ひそまりぬ。

十日。けふは、この那波のごまりに、ごまりぬ。

十一日。あかつきに船を出して、室津を追ふ。人みな、まだねたれば、海のありさまも見えず。たゞ月を見てぞ、西、ひむがしをば、知りける。かくるあひだに、みな夜あけて、手あらひ、例の事ごもして晝になりぬ。いまし、はねといふごころに來ぬ。若きわらは、この所の名をきゝて、はねといふ所は、鳥のはねのやうにやあるといふ。まだ幼きわらは、のこごなれば、人々笑ふごきに、ありける女わらはなむ、この歌をよめる。

まごごにや、名にきくごころ、羽根ならば、

ごぶが如くに、みやこへもがな。

ごぞいへる。男も女も、いかで疾く、みやこへもがなご、思ふ心あれば、この歌よしごにはあらねご、げにご思ひて、人々わす

れず。このはねといふ所こふ童のついでにて、また昔の人を
思ひいでて、何れの時にか、わする。けふは、まして、母の悲む
ことは、下りし時の、人の數たらねば、ふるき歌に、かすはたら
でぞ、かへるへらなる、といふことを、思ひいでて、人のよめる。

世の中に、思ひあれども、子を戀ふる、

おもひにまさる、おもひなきかな。

といひつゝなむ。

十二日。雨ふらず。文時、維茂が、船のおくれたりし、鳴し津より、
室津に着きぬ。

十三日。あかつきに、いさくか雨ふる。しばしありて、やみぬ。男
女、これかれ、湯あみなごせむとて、あたりの、よろしき所にお
りて行く。海をみやれば、

雲もみな、波こそ見ゆる、あまもがな、

いづれか海こそ問ひて知るべく。

こなむ歌よめる。さて十日あまりなれば、月おもしろし。船に
乗りそめし日より、船には、くれなる濃く、よききぬます。それ
は、海の神におちて、といひ、何のあしかげに、こごつ、けて、ほや
の、つまの、鮫、鮓、鮓、をぞ、心にもあらね、はぎにあげ、て、見せあ
はる。

十四日。曉より、雨ふれば、おなじ所に、こまれり。船君、せちみす。
さうじ物なければ、午のときより後に、楫取の、さのふ釣りた
りし鯛に、せになければ、米をこりかけておちられぬ。かゝる
こと多くありぬ。楫取、又鯛もてきたり。米、酒などくる楫取、け
しきあしからず。

十五日。けふ小豆粥にず。くち惜しく、なほ、日のあしければ、るさるほごにぞ、けふ廿日あまり経ぬる。いたづらに日をふれば、人々、海を眺めつゝぞある。女の童のいへる。

たてば立ち、るればまたる、吹く風と、

波ごは思ふ、ごちにやあるらむ。

いふかひなきもの、いへるには、いごにつかはし。

十六日。風波やまねば、なほ、おなじ所にこまれり。たゞ、海に波なくして、いつしか御崎といふ所、わたらむこのみなむ思ふを、風浪、ごにもやむべくもあらず。ある人の、この波のたつを見てよめる歌。

霜だにも、おかぬかたぞこ、いふなれど、

波の中には、雪ぞ降りける。

さて、船に乗りし日より、けふまでに、廿日あまり、五日になりけり。

十七日。曇れる雲なくなりて、あかつきづく夜、いさおもしろければ、船を出して、漕ぎ行く。このあひだに、雲の上も、海の底も、おなじごごくになむありける。うへも、昔のをのこは、棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中のそらを、こはいひけむさゝさしにきけるなり。また、ある人のよめる。

みなぞこの、月の上より、漕ぐ船の、

棹にさはるは、桂なるらむ。

これを聞きて、ある人の、またよめる。

かげ見れば、波のそこなる、ひさかたの、

空こぎわたる、我ぞわびしき。

かくいふあひだに、夜やうやく明けゆくに、楫取ら、黒き雲に
 はかに、出せきぬ。風も吹きぬべし。御船、かへしてむこいひて、
 かへる。このあひだに、雨ふりぬ。いこわびし。
 十八日。なほ、おなし所にあり。海あらければ、船いださず。この
 こまり、遠く見れども、近く見れども、いこ、おもしろし。かゝれ
 ども、苦しければ、何事もおぼえず。男ごちは、心やりによあら
 む。からうたなど、いふべし。船も出さで、いたづらなれば、ある
 人の、よめる。

いそぶりの、よする磯には、年月を、

いつともわかぬ、雪のみぞふる。

この歌は常にせぬ人のことなり。また、ある人の、よめる。

風による、波の磯には、うぐひすも、

春もえしらぬ、花のみぞさく。

この歌どもを、すこしよろしと聞きて、船のをさしける翁、月
 頃のくるしき心やりによめる。

たつ波を、雪か花か、吹く風ぞ、

よせつゝ人を、はかるべらなる。

この歌どもを、人の、何かといふを、ある人の、またきゝて、ふけ
 りてよめるその歌、よめる文字、みそ文字あまり七文字。人み
 な、えあらで、わらふやうなり。歌ぬし、いこ氣色あしくて、ゑま
 ず。まね心こも、えまねはず。書けりこも、え讀みあへ難かるべ
 し。けふだに、いひがたし。まして後には、いかならむ。

十九日。日あしければ、船いださず。

二十日。さのふのやうなれば、船いださず。みな人々、うれへ歎

く。くるしく心もこなければ、たゞ日のへぬる數をけふいくか、二十日、三十日とかぞふれば、およびも、そこなはれぬべし。夜は、いもねず、いごわびし。

廿日の夜の月、出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ、いでくる。かうやうなるを、見てや、むかし、安倍の仲麿といひける人は、もろこしに渡りて、歸り來るごきに、船に乗るべき所にて、かの國人、うまのはなむけし、別れ惜みて、かしこのからうた、つくりなごしける。あかずやありけむ、廿日の夜の月、いづるまでぞ、ありける。その月は、海よりぞ、いでける。それを見て、仲麿のぬし、我國には、かゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今は上、中、下の人も、かうやうに、別を惜み、喜びもあり、悲みもある時には、よむごと、よめりける歌。

○青海原、ふりさけみれば、春日なる、

御笠の山に、出でし月かも。

とぞ、よめりける。かの國人、さゝしるまじう、おほえたれど、事の心を、をここ文字に、さまを書き出して、こゝのことは、つたへたる人に、言ひ知らせければ、こゝろをや聞き得たりけむ。いとおもひの外になむ、めでける。もろこしと、この國とは、ことば異なれど、月のかげは、同じことなるべければ、人の心も同じことにならむ。さて、今そのかみを想ひやりて、ある人の、よめる歌。

都にて、山の端に見し、月なれど、

海より出でて、海にこそ入れ。

廿一日。卯のときは、かりに、船出す。みな人々の船出づ。これを

見れば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞ、ありける。
おぼろげの願ひによりてにやあらむ、風も吹かず。吉き日い
てきて、漕ぎ行く。このあひだに、つかはれむとて、つきてくる
童あり。それが謠ふ船うた。

なほこそ、國の方は、見やらるれ。

わが父母ありと思へば、かへらや。

さうたふぞ、哀れなる。かくうたふをまきつと、漕ぎくるに、く
ろごりこいふ鳥巖の上に集り居り、その巖のもごに、浪しろ
く打ち寄す。楫取のいふやう。くろごりのもごに、しろき涙を
寄すとぞいふ。この詞、なにさはなけれど、物言ふやうにぞ、ま
こえたる。人のほごにあはねば、さがむるなり。かくいひつゝ
行くに、船君なる人、浪を見て、國よりはじめて、海賊むくいせ

むといふなることを思ふ上に、波の又おそろしければ、か
しも皆しらけぬ。なまそちやそちは、海にあるものなりけり。

わがかみの、雪と磯邊の、しらなみこ、

いつれまされり、沖つ島守。

楫取いへ。

廿二日。夜へのごまよりより、ごごまを追ひてぞ行く。遠か
に山見ゆ。年九つばかりなるをの童、年よりは、をさなくぞあ
る。この童、船を漕ぐまにく、山も行くご見ゆるを見て、あや
しき歌をぞよめる。その歌。

漕ぎて行く、船にて見れば、あしびきの、

山さへ行くを、松は知らずや。

ごぞいへる。をさなき童のごごにては、につかはし。けふ、海あ

らけ、磯に、雪ふり、波の花さけり。ある人のよめる。

浪このみ、ひとへに聞けご、色みれば、

雪こ花こに、まがひぬるかな。

廿三日。日てりて、くもりぬ。このわたり、海賊のおそりありこ
いへば、かみ、ほとけを、いのる。

廿四日。きのふの、おなじ所なり。

廿五日。楫取らの、北風あしこいへば、船いださず。海賊おひく
さいふここと、たえず、きこゆ。

廿六日。まことにやあらむ、海賊追ふこいへば、夜なかばかり
より、船を出して、漕ぎくる路に、手向する所あり。楫取して、ぬ
さたてまつらするに、ぬさのひむがしへ散れば、楫取の申し
て、たてまつることは、このぬさの散る方に、御船すみやかに、

漕がしめたまへこ、まをして、たてまつるを聞きて、ある童の、
よめる。

わたつみの、ちぶりの神に、手向する、

ぬさの追ひ風、やまず吹かなむ。

こぞよめる。このあひだに風よければ、楫取いたく誇りて、船
に帆あげよなご、よろこぶ。その音を聞きて、童も、おむなもい
つしかこし思へばにやあらむ、いたくよろこぶ。この中に、淡
路のたうめこいふ人の、よめる歌。

追ひ風の吹きぬる時は、行くふねの、

ほでうちてこそ、うれしかりけれ。

こぞ、ていけのこことにつけて、いへる。

廿七日。風ふき、浪あらければ、船いださず。これかれ、かしこく

歎く。をここだちの、心なくさめに、からうたに、日をのぞめば
都遠しなど、いふなることこのさまをきく、ある女の、よめる
歌。

日をだにも、天雲ちかく、見るものを、

みやこへこおもふ、道のはるけさ。

また、ある人の、よめる。

吹く風の、たえぬかぎりし、立ちくれば、

波路はいさゞ、はるけかりけり。

日ひこ日、風やまず。つまはじきして寝ぬ。

廿八日。よもすがら、雨やまず。けさも。

廿九日。船いだして行くに、日うらく、照りて、こぎ行く。爪
の、いと長くなり。にたるを見て、日をかぞふれば、けふは、子の

日なりければ、さらず。むつきなれば、京の子の日のこといひ
出でく、小松もがなこいへご、海かなれば、難しかし。ある女
かきて出せる歌。

おぼつかな、けふは子の日か、あまならば、

うみまつをだに、ひかましものを。

こぞ、いへる。海にて、子の日の歌にては、いかゞあらむ。また、あ
る人よめる歌。

けふなれど、若菜もつまず、春日野の、

わがこぎわたる、浦になければ。

かくいひつゝ、こぎ行く。おもしろき所に、船を寄せて、こゝや
いつこご、問ひければ、土佐のこまりこぞ、いひける。むかし、土
佐こいひける所に、住みける女、この船にまじれりけり。それ

がいひりらく。むかし、暫しありし所の、名たぐひにぞあなる。
あはれこいひて、よめる歌。

年ごろを、住みし所の、名にしおへば、

きよる浪をも、あはれこそみる。

こそ、いへる。

三十日。雨風ふかず。海賊、夜ありさせさなりと聞きて、夜なか
ばかりに、船をいだして、阿波のみこを渡る。夜なかなれば、西
東も見えず。をこそ、女からく、神ほさけを祈りて、このみこを
渡りぬ。寅卯の時ばかりに、野島といふ所を過ぎて、田無川と
いふ所をわたる。からく急ぎて、和泉の灘といふ所に、いたり
ぬ。けふ、海に波に似たる物なし。神ほさけの、恵み蒙れるに似
たり。けふ船に乗りし日より、かぞふれば、三十日あまり、九日

になり、にけり。今は、和泉の國に來ぬれば、海賊、ものならず。

二月朔日。あしたのま、雨ふる。午の時ばかりに、やみぬれば、和
泉の灘といふ所より出で、漕ぎ行く。海の上、さのふのここ
くに、風浪見え、ず。黒崎の松原を経て行く。こころの名は黒く、
松の色は青く、磯の浪は雪のここくに白く、貝の色は蘇枋に
て、五色に、今ひこ色ぞ足らぬ。このあひだに、けふは、箱の浦と
いふ所より、綱手ひきて行く。かく行くあひだに、ある人の、よ
める歌。

玉くしけ、箱の浦なみ、たぐぬ日は、

海をかみこ、誰か見さらむ。

また、船君のいはく。この月までなりぬること、て、歎きて苦
しきに堪へずして、人もいふこと、て、こころやりに、いへる

歌。

ひく船のつなでの長き春の日を、

よそかいかまでわれは經にけり。

聞く人の思へるやう。なぞたゞ言なるこ、ひそかに言ふべし
船君のからくして、ひねり出して、善しと思へることを得し
もころ、しひねこて、さくめきて、やみぬ。にはかに風なみ、高け
ればこゝまりぬ。

二日。雨風やまず。ひこ日夜すがら、神ほこけを祈る。

三日。海のうへ、きのふのやうなれば、船いださず。風の吹くこ
こやまねば、岸の浪、たちかへる。これにつけて、よめる歌。

緒をよりて、かひなきものは、落ちつもる、
なみだの玉を、ぬかぬなりけり。

かくて、けふも暮れぬ。

四日。楫取、けふ風雲のけしき、甚だ悪むといひて、船いださず
なりぬ。しかれども、ひねもすに浪かぜ立たず。この楫取は、日
も得はからはぬかたゐなりけり。このこまりの濱には、くさ
くのうるはしき貝、石など、おほかり。かくれば、たゞ昔の人
をのみ戀ひつへ、船なる人の、よめる。

よする波、うちも寄せなむ、我戀ふる、

人わすれ貝、おりてひろはむ。

こいへれば、ある人の、堪へずして、船の、こころやりに、よめる。

わすれ貝、ひろひしもせじ、しら玉を、

戀ふるをだにも、かたみとおもはむ。

こなむいへる。をむなごのためには、親をさなくなりぬべし。

玉ならずも、ありけむをぞ、人いはむや、されども、死にし兒、顔
よかりきこいふやうもあり。猶、おなじ所に、日を経ることを、
なげきて、ある女の、よめる歌。

手をひて、さむさも知らぬ、いづみにぞ、
くむこはなしに、日ごろへにける。

五日、けふ、からくして、和泉の灘より、小津のこまりを追ふ。松
原、目もはるく、なり。これかれ、くるしければ、よめる歌。

行けごなほ、行きやられぬは、いもがうむ、

小津のうらなる、岸の松原。

かくいひつゝ、くるほごに、船疾く漕げ、日のよきにご催せば、
楫取、船子共がいはいく。御船より、仰せたぶなり。朝北の、出で來
ぬさきに、綱手はや引けこいふ。この詞の歌のやうなるは、楫

取の、おのづからの詞なり。かちごりは、うつたへに、われ歌の
やうなるここいふごにもあらず。聞く人の、あやしく歌めさ
ても、いへるかな、ごて、書き出せば、げにも、三十文字あまり
なりけり。けふ浪な立ちそご、人々ひねもすに祈るしるしあ
りて、風浪たゞず。今し、かもめ群れるて、遊ぶ所あり。京の近づ
く喜びのあまりに、ある童の、よめる。

祈りくる、かざまご思ふを、あやなくも。

かもめさへだに、浪ご見ゆらむ。

こいひて行くあひだに、石津こいふ所の松原おもしろくて、
濱邊ごほし。また、住吉の、わたりを漕ぎ行く。ある人の、よめる。
いま見てぞ、身をば知りぬる、住の江の、
松よりさきに、われは經にけり。

こゝに、昔の人の母、ひと日かた時も忘れねばよめる。
住の江に、船さしよせよ、忘れ草、

しるゑありやと、摘みて行くべく。

こなむ、うつたへに、忘れなむこにはあらで、戀ひしき心地、しばし休めて、またも戀ふる力にせむこなるべし。かくいひて、ながめつゝくるあひだに、ゆくりなく、風ふきて、漕げども漕げども、しりへに、しぞきにしぞきて、ほしく、打はめつべし。楫取のいはく、この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしきものぞおはすらむこは、今めくものか。さて、ぬさをたてまつりたまへといふ、いふに従ひて、ぬさたてまつる。かくたてまつれども、専ら風やまぞ、いやふきに、いやたちに、風浪のあやふければ、楫取またいはく、ぬさには、御心のゆかねば、御船も

行かぬなり。なほ嬉しと思ひたまふべきもの、たてまつり給へといふ。また、いふにしたがひて、いかゞはせむこて、まなこもこそ二つあれ。唯一つある鏡をたてまつるとて、海にうちはめつれば、くちをし。されば、うちつけに、海は鏡のことなりぬれば、ある人の、よめる歌。

あはやぶる、神のこゝろを、荒るゝ海に、

鏡を入れて、かつ見つるかな。

いたく住の江のわすれ草、岸の姫松なごいふ神には、あらずかし。目もうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取のこさばは、神の御心なりけり。

六日。みをつくしのもこより出で、難波津に着きて、河尻に入る。みな人々、女をさなきもの、額に手を當て、よろこぶこ

と二つなご。かの船るひの淡路の島のおほいこみやこ近くなりぬさいふをよろこびて、船底より頭をもたげさせて、かくぞいへる。

いつしかさ、いぶせかりつる、なにはがた、

あしこぎそけて、みふね來にけり。

いさ思ひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これがなかに、心地なやむ船君、いたくめで、船酔ひし給ひし御顔には似ずもあるかなさ、いひける。

七日。げふは、川尻に船入りたちて、漕ぎのぼる。川の水ひて、なやみわづらふ。船ののぼること、いと難し。かゝるあひだに、船君の病者、もごより、こちこちしき人にて、かうやうのこと、さらには知らざりけり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめで、

都ぼこりにもやあらむ。からくして、あやしき歌、ひねり出せり。その歌。

きこきては、川のほり江の水をあさみ、

舟もわが身も、なづむけふかな。

これは、病をすれば、よめるなるべし。ひさうたに事のあかねば、今ひとつ。

さくさ思ふ、船なやますは、わがために、

水のこゝろの、浅きなるべし、

このうたは、都の近くなりぬる喜びに、堪へずして、いへるなるべし。淡路のごの歌に劣れり。ねたき、いはさらましものを、さくやしがるうちに、よるになりて、ねにけり。

八日。なほ、川のぼりになづみて、鳥養の御牧さ、いふほとりに

ごごまる。こよひ、船君例の病おこりて、いたくなやむ。ある人、いさへかなるもの、もて來たり、よねして、かへりごごす。をこごごも、ひそかにいふなり。いひぼしても釣るごや。かうやうのごご、ごころく、にあり。げふ、せちみすれば、魚もちるず。九日。こゝろもこなきに、あけぬから、船を引きつゝ上れごも、川の氷なければ、あざりにのみぞ、あざる。このあひだに、和田のさまりの、あがれのごころこいふ所あり。よね、いをなごこへば、おくりつ。かくて、船ひき上るに、渚の院こいふ所を見つゝゆく。その處、むかしを思ひやりてみれば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には、松の木ごもあり。中の庭には、梅の花さけり。こゝに人々のいはく。これ、昔、名だかくきこえたる所なり。惟高の親王の御ごもに、在原業平の中將の、世の中

に、絶えて櫻のさかざらば、春の心はのごけからまし、こいふ歌よめる所なりけり。いま興ある人、ごころに似たる歌よめり。

千世へたる、松にはあれご、いにしへの、

こゑのさむさは、かはらざりけり。

また、ある人のよめる。

君こひて、世をふる宿の、梅の花、

むかしの香にぞ、なほにほひける。

こいひてぞ、みやこの近づくをよろこびつゝ、のぼる。かくのぼる人々の中に、京より下りし時に、みな人、子ごもなかりき。いたれりし國にてぞ、子うめるものごもありあへる。みな人、船のごまる所に、子を抱きつゝおりのぼりす。これを見て、む

かしの子の母、かなしきにたへずして、

なかりしも、ありつゝかへる、人の子を、

ありしもなくて、くるが悲しさ。

さいひてぞ泣きける。父も、これをきゝて、いかゞあらむ。かう

やうのこと、歌このむとて、あるにしもあらざるべし。もろこ

しも、こゝも、思ふことに堪へぬ時のわざとか。こよひ、宇土野

さいふごころにこまる。

十日。さはることありて、のぼらず。

十一日。雨いさゝかふりて、やみぬ。かくて棹し上るに、東の方

に、山のよこをれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ。これ

をきゝて、よろこびて、人々、をがみたてまつる。山崎の橋みゆ。

うれしきこと、限りなし。こゝに、相應寺のほごりに、しばし船

をこゝめて、こかくさだむることあり。この寺の岸のほごりに

に、柳おほくあり。ある人、この柳のかげの川のそこにうつれ

るを見て、よめる歌。

さゝれなみ、よするあやをば、あをやぎの、

かげの糸して、織るかごぞみる。

十二日。山崎に、こまれり。

十三日。なほ、やまざきに。

十四日。雨ふる。けふ、車、京へごりにやる。

十五日。けふ、車あてきたれり。船のむづかしさに、船より人の

家に移る。この家人、よろこべるやうにて、あるじしたり。此あ

るじの、また、あるじのよきをみるに、うたて思ほゆ。いろく

に、かへりごさす。家の人の、いでいり、にくげならず、あやゝか

に、かへりごさす。家の人の、いでいり、にくげならず、あやゝか

なり。

十六日。けふの夕つかた、京へのぼるついでに見れば、山崎のたななる小櫃の繪も、まがりの法螺のかたも、かはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬこそ、いふなる。かくて、京へゆくに、島坂にて、人あるじしたり。かならずしも、あるまじきわざなり。立ちて往きしときよりは、かへる時ぞ、人は、さかくありける。これにも、それにもかへりごこす。

夜になして、みやこには入らむとおもへば、いそきしもせぬほごに、月出せぬ。桂川、月のあかきにぞわたる。人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬、更にかはらざりけりといひて、ある人のよめる歌。

久かたの月におひたる、桂川、

そこなるかげも、かはらざりけり。
また、ある人のいへる。

あまぐもの、はるかなりつる、桂川、
袖をひでても、わたりぬるかな。

また、ある人のよめる。

桂川、わが心にも、かよはねど、
おなじふかさな、流るべらなり。

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてくれは、ごころくも見えす。京に入りたあて、うれし。家にいたりて、門に入るに、月あかければ、いさよく、ありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれやぶれたる。家をあづけたりつる人の心も、あれたるなりけり。中垣こそあれ、一つ

家のやうなれば、望みて、あつかれるなり。されば、たよりごに、物もたえず得させたる。こよひ、かゝること、聲高に、ものいはせず。いごはつらく見ゆれど、心ざしはせむとす。さて、池めいて、くぼまり、水つける所あり。ほごりに、松もありき。五年六年のうち、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりけり。いま、生ひたるぞ、まじれる。大かた、皆あれにたれば、あはれごぞ、人々いふ。思ひ出でぬ事なく、おもひこひしきがうちに、この家にて、生れし女子の、諸共に、かへらねば、いかゞはかなしき。船人も、皆子いだきて、のくしる。かゝるうちに、なほかなしみにたへずして、ひそかに、心しれる人ご、いへりける歌。

うまれしも、かへらぬものを、わがやごに、
小松のあるを見るがかなしき。

ごぞいへる。なほ、あかずやありけむ、またなむ。

見し人を、松の千ごせに、見ましかば、

ごほくかなしき、別れせまじや。

わすれがたく、くちをしまごご、多かれご、えつくさず。ごまれかくまれ、ごく、やりてむ。

土佐日記讀本 終

土佐日記讀本附註解

(三) ○男もすこいふ日記云々 當時の風習として、日記
といへば、篁日記出河平仲日記和などの如く、男子の
作るものにて、しかも文章は、みな漢文のものゝみなれ
ば、女のわざにはならず、それを今當時婦女子の間に行は
れたる假字文にて書けるは、めゝしきわざなれば、紀氏
みづから書ける事をかくして、女のかけるおもむきにて
かくれつるなり。この冒頭は、この日記全體の趣意とい
ふべし。「男もすこいふ」とあるを、異本には「男もすなる」と
あり、何れにても文意に大差なし。○その年、或る年
こふいに同じ。實は承平四年なれども、女の日記として、

記者の名をだに記さぬ程なれば、さだかにもさへておほめかしてかけるなり。○師走 陰曆十二月の一稱なり。歳果の略轉とも、又、年中の萬事爲果の月の意ともいへど、詳かならず。○二十日あまり一日 廿一日なり。さて一日の日に、日を重ねるは、今も廿一日の日なごいふに全じ。○戌の時 初更にて、今の午後八時頃なり。○門出 門を出で、旅程に上るをいふ。こゝは、紀氏が土佐の館を出發するをいへるなり。○物に書き付く 物は或る物の名を、それと明示せずして、おほやうにいふ詞なり。こゝは、懷紙などをさせるなるべし。○ある人 實は紀氏みづからをさせるなれど、まへにその年なごいへるが如く、わざとおほめかしていへるなり。○縣

上田の意にして、國司の任國をさせるなり。こゝは土佐の國司をさす。縣をたゞ田舎のことなりといふ説は非なり。○四させ五させ 國司の任限は、この頃四年と定められたり。されば、國に下りて五年目には京にのぼれるなり。紀氏は、延長八年土佐にくたりて、今承平四年に舟出すれば、前後五年なれば、しかいへるなり。○例の事 前官の人より、後任の人に、國務を引渡すをいふ。即キマツテ居ル事トモの意なり。○解由 解由狀のこごなり。解由狀とは、會計公事など、さまざまの事務とこほりなき由の引受證を、後任者より、前任者に渡す證書なり。○船に乗るべき所、牛老川の邊なり。國司の館は、長岡郡にありき。○年ごろよく具しつる人云々

年來よく召し使ひたる人々は、さりとわかれを惜みて、いろいろの酒肴などを取出し、杯など汲みかわして、かれこれ騒ぎ居るうちに、夜はふけたりとなり。なむは他にくらへて重きをおく係辭なり。○のゝしる ガヤク騒ぐことにて、罵詈の義にあらず

二三 ○和泉の國まで云々 都に販るは勿論なれど、まづ、和泉の國まで、海上何事もなく、平らかに、あれかしと願いて舟出すとなり。○藤原言實 フナトモ いかなる人か、知るよしなし。土佐の國人なるべし。○馬のはなむけ 昔は人の旅行せむとするとき、見送りの人々、その人の乗りたる馬を、行く方へ向けて、別を惜み、無事に行けよ、恙なく販りこよなど、云ひ語らひ、又、物など贈るなら

はせなりき。こゝは、船にて、馬に乗るにあられど、かくいへるは、作者の諧謔なり。○上、中、下云々 紀氏以下一同の者、送別の酒に酔ひすぎて、常のさまさかはりてなり。あざれば、漢字にて餒の字をかき、魚肉などの腐爛することなるが、こゝは人々の混雜に戯れ合ふことにかけて云へり。さて魚は鹽に漬けおけば腐らぬものなるに、この人々は不思議にも、鹽海のほりにてあされ合へりぞ、例の諧謔に云へるなり。○八木の康教 傳記詳ならず。異本に、山の康教に作る。○この人云々 この康教は、器量もあり、由緒ある人なれば、國司などに、召し使はるゝ人にはあらず。唯、時々來ることありて、知りたる人なりとなり。○これぞ云々 この康教は、平生、

恩をかけたる人にはあらねど。この人ばかりは、禮義を知りて、立派に、餞別をなしたりとなり。それは、多くの中にて、一つを取り出で、強く指す係辭なり。○かみがらにやあらむ云々。かみは、守にて國司をいふ。國守のあしかりし故ならんこ、紀氏みづから謙遜の詞なり。それは、在任中は何彼と追従をいひ集り來りしもの、今は任果て、京に上るといふ時に、送りても來ず、餞別にも來らざるを、義理心あるものは、國人に對して、耻を願みず來ることよとなり。○これは物によりて云々。これは、餞別に贈れる品のよきものなるが故にあらず。全く、その人の真心に感じて云ふとなり。これ亦例の戯れの筆づかひなり。○講師 延喜、立蕃式に、凡、諸國講師

擇年四十五已上讀師四十已上補之、とあり。中古の制、國ごとに國分寺ありて、その住職を講師といひ、その國の僧尼の司なり。これは、土佐の國分寺の講師なり。○ありとある云々。そこにありあふ人々は、上下貴賤の別なく、講師が贈れる酒に、皆、酔ひて、一字の文字も讀みえぬ者にて、その足は、ヒヨロ／＼と千鳥足に、十文字を踏みて興じあへりとなり。しれては、痴れてにて、酔ひくづれて、正體なきをいふ。ものしがのこは、その物を強く指定する語なり。講師の來るといふより、文字知らぬものが、文字をなして遊ぶといひ、足は、こいひて、文かく手を思はせたるなど、簡結にして、照應の巧なる書きぶり想ふべし。

三三〇かみの館 新任の土佐國司の館なり 一日ひこひ云々 終日終夜の義なり ○こかく云々 ことやかくやしうて、うちこけ遊び樂しみてなり ○あるじよ あるじは、もご、主人の意なれど、主人は、賓客に對して、饗應すべきものなれば、轉じて、饗應の義にも用ふるなり ○物かつけたり かつけは、被の義にて、纏頭の字をあて、物與ふる意なり。自分は、もごより従者まてに、物をくれたりとなり ○からうた 唐歌にて、詩をいふ ○やまごうた云々 詩に對して、和歌をいふ。あるじは、新任國守、まらうごは、客人の義にて、貫之をいひ、こ人は、別人にて、その席に居る請件の人々をいふ ○これにはかゝず この日記は、女のものごしてかけるが

故に、詩などしるさんは、似つかはしからねば、こゝには、書かずとなり ○みやこ出で、云々 都を立ち出で、紀氏の君に逢はんこ、それをたのしみに、はるく、此國に來りしものを、來りし甲斐もなく、貴君は都、私にはこゝこ、東西にわかるゝ事か、さても、なごりをしき事よとなり ○歸るさきのかみ 都へ歸る前の守、即、紀氏をさす ○しろたへの云々 かくの如く、遠き海路をゆきかへりて、からきめにあへる人は、外にもあらじご思ひしを、又、われに似て、君にもからき波路をへて來ませる事よこ、新國司を勞りてよみしなり。○しろたへは、白袴にて、衣、袖、雲、雪、浪なごの冠詞なり。ゆきかひは、往反の字にて、往來するをいふ。たれならな

くには、たれにもあらず、即、貴君なりとうちかへして
 いふ語なり ○さかしま 賢の字を訓めど、こゝは、よ
 き歌といふ程の意に用ひたるなり
 四 ○今のも 今の國司もなり ○おりて 館をおりて
 立ち出づるなり ○今のあるじも云々 今のあるじは、
 新國司にて、前のものは、紀氏みづからをいふ ○酔ひ言
 に云々 酔ひたるあまりに、首途（まへ）の祝（いわ）なご心地よげにし
 て、館を出づるなり。こゝちは、心持（こころもち）の略なり ○大津
 浦戸 共に土佐の國の地名なり ○かくあるうちに 出
 立の支度する間にの意なり ○京にて生れしをむな
 しく云々 此國に赴任せざる以前、都にて産れし女子を、
 この國につれ來りしが、俄なる病氣にて、死去せるによ

りて、今出立に臨み、いろくの用意なご忙しけれど、
 その子を伴ひ販らざることを憶ひ出し、何事も手につか
 ず、唯、鬱々（ふさふさ）と悲しみ居るこの義なり。こゝにしては、
 この泊にて、うせたるにはあらず、土佐の國にての意な
 り。又女子の亡せたるは、この出立の際にてはなかるべ
 し、唯、その伴ひ販らざることを、このまぎはに、憶ひ出
 せしなり、かくて、懷舊の心も一層あはれなるなり ○
 ある人々も云々 紀氏夫婦のみならず、外の人までも、
 悲みにたへずとなり ○みやこへ云々 かゝる遠國よ
 り、都へ販らむとする事故、嬉しくたのしき筈なるに、
 却て物悲しく思はるゝは、伴ひ來りし愛兒が、この國に
 て死にて共につれ販るこの叶はぬがためとなり。かへ

らぬに、都へ販らぬこ、死して再び販らぬこをかけたるなり。この歌は、貫之のにて、宇治拾遺にも、貫之の歌さしてあげたり。○あるものこ云々 愛兒の亡せしこと忘れ今もあるものこ思ひ、ドレドユに居るぞこ問ふことのあるも、悲しき事のかぎりなりこの意。これも紀氏の歌なり

〔五〕○鹿兒の崎 土佐の地名。大津と並びたる處にて、浦戸に向ふ途中なり。○かみのはらから 新任國守の兄弟なり。○磯におりゐて、磯は湖海のほこりをいふ。おりゐては、舟より下り居てなり。○かみの館の云々 かの新任國守の館の人々多き中に、今日わざく追ひ來りて、別を惜む人々ぞ、殊にあつき眞實なる人のやうに、

船中の人々、うすく小聲に噂せらるゝとなり。○口網ももろもち云々 口網とは、本居宣長の説に、今の世に、海人のしわざに、引網さ、いふありて、それに、口網、奥網さあり。その口網は、ひろさ六七尺ばかり、長さは五六十丈もあるを、海中へはへおきて、魚をさる、それを引きあぐる時に、漁人ども、大勢なみ立ちて、擔ひ出だすことあり見ゆ。人々の口からくすみやかにも云ひ出でず、歌よむこと、口重きを、戯れに、かの口網のおもくて大勢の人のかゝりて擔ひ出だすにたこへたりしならん。○をしと思ふ云々 をしは惜しにて、これに驚をかけ、驚さいふより、葦鴨さいひて、句のあやをなし、打むれてさいはん料こしたるなり。あし鴨は、葦鴨にて、

多く葦の生ひたるほごりにをるのも故に、かくいひたるにて、尋常の鴨をいふ。鴨の類は、多く群り飛ぶものなれば、打むれの冠詞としたるなり。うちむれのうちは、添詞なり。あし鴨のの文字は、の如くの意にて、玉の顔、氷の刃などの文字に全じ。一首の意は、別れ惜じと思ふ君の、若しや留ることもあらむかこ、かく多人數にて、あごを追ひ來れりとなり。○いごいたくめで、甚しく褒めてなり。此歌よきにあらねど、重き口より、やうく詠みじものから、わざと褒むるは例の戯れなり。○棹させご云々、そこひは、際涯などの義にて、キハミなどいふに同じ。わたつみは、もと海を領する神なれど、轉じて、唯、海の事をいふ。一首の意は、棹を

さすも、底のはても知れぬ海の如き深き志を、君等に見る事よごなり

〔六〕 ○ものゝあはれも云々 楫取は、別を惜む人々の心も知らずに、おのれ一人のみ酒を飲み飽きたれば、早く船出せんとして、潮も満ち來れり、風も吹き出づべし、早く乗り給へと騒ぎ立つる故、心ならずも、舟にのらんとするなりと ○折ふしに云々 今、舟に乗り出でんとする時に、送り來りし人、別を惜むにかなふやうなる、古詩なごうたひしなるべし ○西の國 土佐は、京より西の國なれば、東なる甲斐に應じて、わさこ、戯れていへるなり ○甲斐歌 季吟の説に、古今集に、「甲斐が嶺をさやにも見しがけ、れなく、よこほりふせるさやの中山」

また、甲斐が根をねごし山こし吹く風を、人にもがも
 な言うてやらむ」といふ二首あり。さて、はじめの歌は、
 このかちごりの往かんことを急ぐを、かく別のをしき
 をりに心もなくいはんためにや。後の歌は、送り來りし
 人々、もごは、都の人なれば、京におもふ人なきにもあ
 らぬ折ふし、かちごりの風も吹さぬべしといひ騒げば、
 其の風を人にもがな、言傳てやらんといふ意にうたへる
 なるべしと云へり。こゝにて、殊更に、甲斐歌をうたへ
 ること、季吟の説の如くなるべし。○ふなやかたの塵も
 云々 舟の上に屋の形を設けたるを舟屋形といふ。かく
 うたふ聲は、高くうるはしくして、舟の上の塵を動かさし、
 天上の雲をこゝむるばかりなりとなり。これは、壯子

通典に、漢、虞公善歌能令梁上塵起、又、列子に、秦青之
 聲振林木響遏行雲とあるを轉じていひなしたるなり。こ
 れ、歌ひし調子に、無心のものまで感動したるさまなり
 ○浦戸 吾川郡の内、海に出でたる崎にあり ○大湊
 を追ふ 大湊は、長岡郡と香美郡との間にある湊なり。
 おふは、風に舟を追はすることにて、舟人の言を、その
 まゝにうつせしなり ○はやくのかみの子 紀氏より前
 の守の子なり。任はて、その子のみは、猶、土佐に留
 りゐたるなるべし ○山口の千峯 傳記詳ならず ○よ
 きもの 肴なり ○くすし 當時の制、一國に一人づゝ、
 朝廷より醫師をおかれたり。大寶令に、凡、國博士醫
 各師一人と見えたり ○ふりはへて ワザの意なり

○屠蘇、白散云々 共に、正月元日に用ふる藥酒なり、延喜式に、屠蘇酒は、惡氣温疫を治し、邪風毒氣を辟く見え、白散も、同書に、歳旦に、温酒をもて服すべし。一家に藥あれば、一里に病なし。この散を帶すれば、病氣、皆、消ゆ見えたり。この屠蘇、白散に酒さへ加へての義なり

〔七〕 ○志あるに似たり 頗る、志のあつきやうなりとほめたるなり ○ついたり 承平五年正月元日なり ○白散を云々 彼の醫師のもて來たる、屠蘇、白散を、船中にある者、夜分のととて、こゝにても大丈夫なりといひて、舟のやかたに挿みおきたりしかば、風の吹くにまかせて、海に吹き入れられたれば、飲むことも能はずなれ

りとなり。吹きならさせを、異本には、吹きながさせとあり。さらば、吹きおとしして、海に流したることにて、文意は、解し易し。されど、吹きならさせては、風に吹き馴れさせの意にて、風に吹かれ、て勝手にさするることなり ○芋もあらめも云々 芋、滑海藻など、共に、元日に用ふる祝ひものなり。齒がためは、齒固にて、齒は齡の義なり。これ、齡を固むる祝事にして、ふるくは、猪、鹿の肉など用ひたりしが、後には、鏡餅、芋、串柿、押鮎などを用ひたり。こゝは、主として、此類の餅などをさせるならん ○かやうの物云々 かやうは、かやくの音便にて、かゝるものといふに全じ。この大湊あたりは、片田舎の物さびたる處なれば、かゝる物もな

しごなり ○もごめしもおかず 求めおくべかりしを、
 求めもおかずごなり。しは強辭なり ○押鮎の口をのみ
 ぞ吸ふ云々 押鮎は、乾したる年魚にして、ふるくより、
 土佐の名産なり。芋も海帶も、齒固もなければ、たゞ、
 押年魚の口頭なごばかり吸ひたりごなり。口を吸ふご
 は、年魚固き故に、齒もたちかぬれば、幾度ごなく、な
 め食ふさまを戯れてかくいへるなり ○もし云々 もし
 は、萬一ごいはんが如し。このもごの下に、「心あらば」
 なごいふ語を加へて解すべし。もし年魚心あらば、何ご
 か思はごむなり ○こゝのへ 天皇の御殿をいふ ○し
 りくめなは 端出之繩にて、今のしめ繩なり。これは、
 禍の入らぬやうに、へだつるしるしに張るものなり ○

なよし 又、鱈鱈ごもいふ。古來、名吉名吉ご唱へ、出世の魚
 ごいへり。さて頭のみを用ふるは、その腐敗せざらんが
 ためなり。後世は、なよしに換ふるに、鰯を以てせり
 ○ひゝら木ら 葉にごげありて、四時不變の植物なれば、
 祝ひて、歳首の飾物ごなしたるならん。らは、等の意
 なり ○おこせたり 今のヨユシタリごいふに全じ ○
 もし風波の云々 こゝのもごは、或はごいふ意なり。風
 波の都合あしくて、かく毎日、大湊に留り居るは、或は
 心なき風波が、我等を暫しご引き留めて、別を惜む心な
 らんも知るべからずごなり ○こゝろもごなし 無無心許
 ごかく。待遠にて、又、おぼつかなく氣づかはしくおも
 ふ意なり

〔八〕 ○昌連 貫之國守たりし時の屬官なごにやあらん。傳記詳ならず ○たいまつれり たてまつるの音便なり。貫之は、主人にして、記者は、女なれば、わざこ、かく教語を用ひしなり ○なほしも之あらで、なほは、黙の字を訓みて、徒にの義。しもは、強めの詞なり。えあらでは、そのまゝにしておがずの義なり。かくものを、贈りくるゝに、黙しても居られずとなり ○いさゝけわせさす物もなし せめて聊ばかりのもてなしだにせばさやとおもへど、船中のとなれば、何事も心にまかせずとなり ○にぎはゝしきやうなれど云々 酒肴なご取り亂して、賑やかなるやうなご、何れも人の馳走のみにて、その人々の志に對して、此方が、心さびしくまくるやう

に思はるごなり ○ごぶらひにくごぶらひは、訪問の意にて、人々たえず、見舞に来るなり ○あをうま云々 あをうまは、青馬の節會の略語なり。正月七日、天皇豊樂殿に出御し給ひて、白馬を見給ふ儀なり。又、之を白馬の節會ごもかく。青馬ごいへど、實は、白馬なりごぞ。古歌に、「ふる雪に色もかはらでひくものを、たかあをうまご名づけそめけん」なごあるにて、白馬なるごごを知るべし。さて、馬は青陽の氣を調ふるものなる故に、年頭に青馬を見れば、年中の邪氣を遠さくるなごいへる説より起れるなり。さて、けふは、七日なれば、京にあれば、青馬の儀式を見るべけれど、こゝは、田舎の事ゆゑ、それも詮なし。たゞ、海面に、白き波のみ見ゆるご

いひて、青馬より白き波ご、詞をあやなして、滑稽の中に風波の歌まざるをかこてるなり。○人の家の池ご名ある所より池ごいふ名のつきたる所に、住める人の家よりなり。○鯉はなくて云々池ごいふ名の地なれば、鯉はあるべき筈なるに、その鯉はなくて、鮒以下川魚海魚さては他の食物なご、長持に澤山擔はせて贈りくれたりごなり。○若菜籠に入れて雉なご花につけたり。籠は、ユご訓むべし。今のカエごいふもこれなり。花は、今、正月なれば、梅の花なるべし。木の枝に鳥をつくるごは、一つの禮儀にて、この頃の書におほく見えたり。○若菜ぞ云々七日なるに、青馬も見ねば、そのしるしなきに、この若菜ぞ、今日の七日なるごを知らせたりご

て、似つかはしきを喜べるなり。○歌あり。贈り主よりの歌なり。
 [九] ○淺茅生の云々。淺茅生は、茅花のまばらに生ひたる所をいふ。こゝは、野の冠詞におきたるなり。一首の大意は、池ごいふは、名ばかりにて、實は、茅花などの生ずる、野邊で摘みました若菜をござりますれば、味もいかゞあらんと思ひますが、今日のしるしばかりに、進上しますごなり。○いごをかごをかしは、をもしろごの意にて、貫之右の歌をほめたるなり。かしは、語勢をつよむる助辭なり。○よき人云々都にて身分の貴き女が、夫に従ひて此國に下りて、住みたるありて、その家より、ささきの贈物を、よこしたりごの意なり。されば、

かく風流の贈物をもなせるなり ○わらは 小兒を云ふ
 ○腹つゞみを打ちて云々 船子ごもは、馳走に飽き、
 腹なごたゝきて、樂み騒げば 海まごひゞきて、波を
 もたてさうな有様なりとなり ○この間に事多かりか
 へる間に、訪ひ来る人あまたありて、いろくの事杯、
 書くべきこと多しとなり。下文も、そのうちの、一つな
 り ○破籠 食物を入るゝ器にて、今の重箱の如きもの
 なり ○その名なごぞや云々 その人の名は何さかいひ
 けん、忘れたりしが、今考へ出さむとなり ○この人云
 々 この人は歌よむ下心ありて、なにやかやと話したる
 末、風波の歌まぬことなご憂へなごして、遂に歌をよみ
 出でたりとなり ○ゆくさまに云々 貴君が船路の行く

さまに、たつ白波の音よりも、御わかれ申して、この地
 におくれのこりて、悲しみ泣く、私の聲の方が、よほど、
 大きくありませうとなり
 〔一〇〕 ○もてきたるものよりは云々 破子の贈物よりは、
 この歌は、いかゝあらん。劣れるやうなりとなり ○
 あはれがれごも云々 船中の人々、この歌を、かれこれ
 譽めそやせご、一人も返歌するものもなし。あはれがる
 は、おもしろしご、感じほむるやうなるをいふ ○しつ
 べき人も云々 返歌するだけの歌よみも中に交り居れご、
 この歌をのみ譽むるやうにて、實は嘲りそしりて、たゞ、
 もて來たれる物のみを食ひをる中に、夜ふけたりとな
 り ○この歌ぬし云々 人々の返歌もせぬにキマリわる

くなりしかば、又參るべしといひて、立ち去りたりとなり。まからずは、まからんずに全じ。ずは不の意にあらずして、まからんずといふことなり。今も、田舎詞に、行カウの意を、行かずといふ地方あり。こゝのも、土佐のなまりを、そのまゝ取りて書かれたるならん。○ある人の子の云々ある人は紀氏にて、わらはは童子の義なり。まろは卑下して云ふ詞にて、我れ云ふに全じ。○おごろきて云々紀氏の子の年ゆかぬ童女が、返歌せんといひ出でたれば、人々もおごろきて、ユハ興あることかな、詠まるゝか、詠まるまじ。詠まるゝことならば、はやくいひて見よとなり。かなは歎息の辭にて、マアといふに全じ。やはは反語にて、詠めるか、詠めまじとい

ふ義なり。○たちぬる人をまちて云々前の立ち去りし人の、来るを待ちて、目の前にて詠まんといふ。さらばさて、其人を尋ね求めけるに、夜の更けたればにや、そのまゝ直に歸り去りて、居らずこの意なり。そもくいかにかに詠みたるか不審がりて問へば、却て耻かしがりていはず。強ひて問へばいへる歌に、「行く人も云々」あり。二一〇ゆく人も云々別れて行く人も、こゝに止まる人も、互に別を惜みて、泣く涙が川になり、その川の水が、汀をぬらす如く、このあたりに居る人々の袖は、みな涙にぬれまさることなり。汀は水際の義なり。○かくはいふものかかやうにも、よく詠みたるものかなと、驚きほめたる詞なり。こゝのかは、かなと全じく歎息辭な

り ○うつくしければにやあらむ うつくしは、憐、又、
 愛の字を訓みて、我が子を愛する心がらにやあらんこ
 なり ○おもはずなり 意外に、この歌は、上出来なり
 となり ○わらはごごにて云々 かほごの歌を、少女の
 作ごしては、不似合なり。 嫗、翁の歌にすべしとなり。
 かはせんは、何ぞ少女の歌ごなしおくべきの意。をしつ
 べしのをは、感歎の意なり ○あしくもあれ云々 假令
 此歌は、あしくもあれ、よくもあれ、便りあらば、先の
 人にやらんごて、貫之の手許に書きごめおかれたる様
 子なりごの意なり。 めりは、見えありの約にて、しか見
 ゆごおしはかりていふ詞なり。 これ、作者は女なれば、
 傍より見たるやうに書けるなり ○業平の君の云々 古

今集雜上に、「あかなくにまだきも月のかくる、か山の端
 にげて入れずもあらむ」ごあり。 もし、業平朝臣が、今宵
 の如く、月を海邊に觀て詠まんには、「浪たちさへて入れ
 ずもあらなむ」ごよむべきかごなり。 前の歌は、「山が逃げ
 て月をかくさずに、居てくれ、ばよい」ごの意なれど、こ
 の歌は、「波が立ち遮りて、月を海の中に入れずに居てく
 れ、ばよい」ごの意なり ○てる月の云々 紀氏の歌なり。
 月を見れば、西の海に流る、やうなるが、空と海とは
 一つのやうなり。 之を思へば、天上の銀河も、流れ出づ
 る湊は、この世界の海にぞありけるごなり。 さりけるは、
 ぞありけるの約語。 ごやはごかやの意なり
 〇つごめて その翌早朝といふ意なり ○那波の

ごまり 土佐國香美郡にあり ○國のさかひ云々 國ご
 國ごの堺にはあらず。長岡郡より、東の香美郡へ移りて、
 界を異にする故かくはいへるなり。その故は、御崎を
 過ぐるまでは、土佐の國なるにて知るべし ○藤原の言
 實云々 言實、季衡は前に見えたる人々なり。行政は、
 いかなる人か傳記知られず。さて、御館、又、たまひひな
 ご敬語を用ひたるは、記者は女ごしてかければなり ○
 海のほごりに云々 海邊に留りて、見送る人の影も遠く
 なりぬ、海邊より見れば、此の船中の人も見えすなりぬ
 べし。「見えすなりぬへし」といふべきを「なりぬ」といへる
 は、「船の人も見えすなりぬ」と、彼方になりていへるなり。
 これ口調を一にせんかためにて、こゝの筆づかひ、最

巧なり ○かゝねご しかしながらに全じ
 〔三三〕 ○思ひやる云々 海邊に止まる人々を、こゝより
 おもひやる心は、海を渡れども、文をやるべきたよりな
 ければ、海邊の人々は、我心を知らずやあるならんとな
 り。わたれどもいふより、ふみしなればごいひて、文
 に踏を兼ねたるなり ○いくそばく 幾十許の意なるべ
 し。幾本ごもなく、立ちならびたるをいふ ○もごごご
 に 松の木の本ごごになり ○鶴ぞ飛びかふ 飛びち
 がふなり ○船人 船中の人にて、紀氏のとなれご、お
 ぼやうに云へるなり ○みわたせば云々 うれごは、萬
 葉に、末の字を訓み、木末の事なり。ごちは、共の字に
 て、同じ類をいふ語なり。友達ごいふごごなり。べらは、

へきといふに全じ。様子といふ意の詞にて、當時流行せし詞なり。一首の意は、松原を見わたせば、松の梢に住み居る鶴は、その松を千歳の友達同志とおもへるならんとなり。○この歌は云々。この歌は、所の景色に較ぶれば、歌の方おされりとなり。○てけの事は云々。てけは天氣なり。明日の天氣のことは、いかに思へど、それは楫取の心にまかせつとなり。○男も云々。男の中にも、船路になれざる人は、いさ心細し。まして女は、恐しく思ひて、舟の底にうつ伏して、聲を出して泣き居たりとなり。夜の渡海は、今宵がはじめてなれば、人その恐れたること、さもあるべし。

二四 ○思へらず、思ひ居らずの義なり。○春の野にて

ぞ云々。春の野に出で、薄なごにて、手を切り傷け、聲をあげて泣きながら、摘みたる若菜なるを、おもふ人は食はで、親や姑が貪り食ふらむ。甲斐なきことかなとなり。かへらやは、舟歌の柏子なり。○よんべうなるもかな云々。昨夜の童子が来ればよい。錢を催促してやらむ。代價も拂はず、品をたゞ持ちゆきたるまゝ、今日も、なほ、錢もよこさず、そのうへ、自分の姿もかくして、一向見せぬ、さても悲しきことなり。おぎのりわざとは、物を持ちかへりて、價を拂はぬをいふ。賒のことなり。○これならず云々。こればかりにはあらず、歌ひし俗歌いさ多くあれど、こゝに書きこめずとなり。○人の笑をきゝて云々。かゝる俗歌のひなびたるをきゝ

たれば、人々笑ひ興ずるをきゝて、浪高きに懼ぢ恐れて
 さわぐ心も、少しは穩かになりきこなり。さて海の荒る
 べしといひ、和なぎぬといへるは、例の巧なる筆なり。○こ
 まり、那波の泊なり。○おきな人ひこり云々。老翁一人
 と老嫗とは、大勢の乗客中にて、心地あしくて食物もく
 はず、弱り居るここなり。たうめは、年老たる女なり。
 こゝは紀氏夫婦のここなり。ひそまるは、顰しんの字にて、
 樂まざるの状なり。

〔二五〕 ○室津 土佐の國安藝郡にありこ。○夜あけて云
 々、こかくする間に、夜も明けたれば、おき出で、手
 洗ひ、口すゝぎなどして、神佛を拜し、食事をするなど、
 定まれる事ごもして、その中ほごなく、晝になりぬこ

なり。○いましこゝのしは、強めの助辭なり。○はね
 守部の説に、安藝の郡なる、きら川の湊のほこりなり
 といへり。○ありける女わらは、船中にありける女童に
 て、紀氏の女なり。○まここにや云々。まここに羽とい
 ふ所ならば、その羽にて空ごぶ如く、この船、はやく、
 都へいたれかしこなり。がなは、願の意なり。

〔二六〕 ○また昔の人 前にある、死去したる貫之の女子
 をいふ。○何れの時にかわする、かは反語なり。何時
 になりたらば、忘るゝ時があらう、いつまで立ちても、
 忘るゝ時はなしこなり。○母 紀氏の妻なり。○ふるさ
 歌に云々。古今集の羈旅の部に、「北へゆく雁ぞなくなる
 つれて來し數は足らぞ販るべらなる」とある歌なり。く

だりし時の人の數たらねばとは、土佐の國にて死にたる
 が故に、それにつけて、古歌を憶ひ出して歎くなり。○
 世の中に云々 うき世の中には、いろ／＼の心配はあれ
 ども、その中にて、子を戀ひ慕ふ思にまさるおもひはな
 しこの意なり。○ごいひつゝなむ かやうに云ひつゝ、
 なき悲しみたりとなり。○文時ふみとき維茂いもち云々 この二人は、
 紀氏の屬官なごなりしならん、傳記詳ならず。○鳴し津なるしづ
 大湊のこごなり。○これかれ 誰れも彼れもなり。○
 あたりのよろしき所 その邊の便宜なる場所をいふ。○
 おりて行く 船より陸におり行くなり。○
 二七 ○雲もみな云々 晴れのこる雲も、皆ひとつに白
 浪の色さ見ゆるが、海人ごも來れよかし、何れの方が海

ならんご、問ひて知らんものをごなり。○船に乗りそめ
 し日より云々 海神といふものは、物めでするものゝよ
 しなれば、紅色の濃きうるはしき衣は、海神におちて、
 着すごなり。○何のあしかけにこごつけて云々 この文
 につきては、諸説まち／＼なり。その中、舟の直路の説
 は、最、わかりやすければ、左に、抄説す。さて、海の
 神の障礙をなすごあるに、おちて、色ある衣だに着ぬ
 程のこごなれば、髪かたち、身も、ごりくづし、此の上
 に、何をかは耻ぢんごて、女ごもが、いご氣づよくなり
 て、なにのそのご云ひつゝ、そこらあたりの、芦陰に、
 かこつけて、湯あみすごて、老いたるも、若きも、破籠
 贈物の中にありし、海鼠うしの妻の貽鮓いさげ、鮓いさげ、鰻うなぎの形したる、

おのくの隠しごころをぞ、平日の心にもあらず、しりまくりて、皆、見せけるが、をかしさよとなり。ほやのつまの云々は、色も形も、そのまゝ、女陰のごときもなれば、しか形容したるなり。○船君せちみす。船君は、その舟中の主君のごとにて、紀氏をいふ。せちみは、節忌の義にて、物忌みすることなり。當時は一ヶ月の中、八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、卅日には、魚類を食はず、精進して物忌せしものにて、これを六齊日といふ。○さうじ物云々。さうじ物は精進物なり。十四日は、齊日にて、魚肉など食ふまじき日なれど、舟の中のこさへて、不自由なれば、朝のうちのみ、精進して、午後には、楫取が昨日釣りし鯛を、錢なき故、米に

取り換へて、精進おちをせられたりごなり。○米、酒などくる云々。くるは、クレテヤルなどいはんが如し。與ふる義なり。米や酒を度々與へたれば、楫取も機嫌あしからずごなり。

〔二八〕 ○小豆粥にず。今日は、十五日なれば、小豆粥煮るべき日なれど、旅中なれば、そのことも叶はずごなり。○なほ日あしければ、毎日毎日、日和あしく、風波も荒きなり。○ゐざる。膝行の義にて、速に進まざるを云ふ。○たてば立ち云々。風が吹き起てば、波もたち、風が静まれば、波も静まりて、かく一つこゝろなるは、吹く風と立つ浪とは、親しき中の友ならむごなり。ゐるは安坐することにて、浪の静まるに譬へたり。○いふかひ

なきもの、云々 いふかひなきは、數ならず、言ふにも
 足らぬものをいふ。この歌は、小兒のつまらぬもの、歌
 ごとしては、よく似合ひたりこの意なり ○御崎 室津よ
 り、三四里東南にさし出でたる崎にて、俗に門崎ともい
 ふとぞ ○霜だにも云々 更に霜もおかぬ、暖國の海濱
 なりといふなれど、立つ浪の中には、雪さへ降りりとい
 ひて、風波の荒きさまをよめるなり
 〔二九〕 ○あかつきづく夜 夜明方の月なり ○雲の上も
 云々 一天すみわたりて、空は浪にうつり、浪は空を浸
 して、大空も海底も、同じ様に思はるとなり ○うへも
 實にもこの意にして、もは感動詞なり。又むへともいふ
 ○昔のをのこ 賈島をさせるなれど、ここさらには、お

ぼめかして、名をかゝぬなり ○棹は穿つ云々 漁隱叢
 話に、棹穿、波底月、船壓水中天とあり。こゝの光景、こ
 の詩によく似たれば、思ひ寄せてかけるなり。さて原詩
 には、波底とあるを、波上とし、水中とあるを、海中と、
 文字を少しかへて用ひ、なほ、此詩を見知りていふに
 はあらず、人の言ふを、きゝさしたるなりとこごわりた
 るも、女の筆なることを知らせたるなり。きゝさしとは、
 しかと聞かぬをいふ。聞くともなしに、聞き覺えたり
 となり ○みなぞこの云々 海の底に、月影がうつる、
 その月の上から漕ぎ行く、舟の棹にさはる海藻の如きも
 のは、月中にありとさゝし、桂の樹なるべしとなり。さ
 て、月中の桂のことは、西陽雜俎に、月中桂高五百丈、

下有_二一人常斫之_一とあり。和名抄にも、月中有河々上有桂高五百丈など見えたり。これ等の故事によりて、月の桂などいふなり。○かげ見れば云々。大空の影の水中にうつれるを見れば、遠き海原、尙一層ひろく見へて、まことの空の如し。されば、それを漕ぎ行く我は、何となく、おそろしき心持がするとなり。ひさかたは、天、空、日、月、星、雲などにかゝる枕詞なり。わびしきは、困却して、難儀に思ふさまなり。

三〇 ○御船かへしてむ。御船をもこの室津に、かへさんといふ。紀氏みづからの舟を、御舟といひて、敬語を用ひたるは、例の筆なり。○苦しければ云々。風波のため、酔ひ心持くるしければ、其景色も十分に見ずとなり。

り。○心やりにやあらむ。遣問の字を訓みしにて、今言に、ウサハラシなどいふに全じ。○いたづらなれば舟も出さず、無益に居る事なればこの義なり。○いそぶりの云々。いそぶりは、磯觸にて、波の磯の觸るゝがもことにて、轉じて、荒波のこをいふ。荒波の打寄する磯には、時節を何時とも定めぬ、雪のみふれりとなり。波を雪に見なしたるなり。○この歌は云々。この歌は、常にあまり歌をよまぬ人の歌なりとなり。こは言にて、即ち歌を云ふ。○風による云々。吹く風に、荒波の打寄する磯には、鶯も知らず、春も知らぬ、花の咲くよとなり。これは、浪を花にたとへたる歌なり。

三一 ○少しよろし云々。前の二首の歌を、大分よき歌

ちごほく思ひて、いつ都へゆかるゝかご、氣づかひ、たゞ徒に日の經たる數をのみ、毎日、幾度もなく、指をり數ふれば、あまりしばくにて、それがために、指も傷ふほごなりごなり。およびは、指の古言なり。○いもねずいは安眠なり。安眠して寢ずごなり。○見てや見てにやあらんごの意なり。○安倍の仲麿 仲麿は、奈良朝の人なり。靈龜二年、留學生ごなりて唐に渡り、後、唐に仕へて名を朝衡ご改め、光祿大夫、散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公に歴進す。わが寶龜十年、年七十三を以て、彼地に卒す。事は、讀日本紀に審なり。○もろこし 唐土をいふ。○歸り來るごき 仲麿は、一たび、日本に販らんごしけれが、難船に遇ひて、終に彼地にかへ

り卒せしなり。○船に乗るへき所 明州の海岸をさせるなり。○彼の國人云々 彼の國の親しかりし人々、離別の宴を張り、わかれを惜みて、詩を賦して、その情の切なるをいへりごなり。この時、王維が仲麿を送れる詩に、積水不可極、安知滄海東、九州何處遠、萬里若乘空、向國權看日、歸帆但信風、熬身映天黑、魚眼射波紅、鄉國扶桑外、主人孤島中、別離方異域、音信若爲通、ごあり、○あかずやありけん 別を惜みて、なほなごり惜く、飽き足らずやありけんごなり。○ぬし 大人ごもいふ、尊稱なり。○神代より云々 仲麿、月を觀て、諸人に語れるは、我が日本には、歌ごいふものありて、神の御代より、神だちもよみ給ひ、今は、貴賤上下おしなべて、か

やうに別れを惜むにも、又歎ばしき事あるにも、悲しき事のあるにも、そのごまに詠むなりとて、下の一首を詠めり、たびは、たまひの中略なり

〇青海原云々 青海原を、古今集には、天の原とあり。實は天の原なるを、わざと青海原と改めしは、海上に適切ならしめむとて、作者の意を用ひたるなり。一首の意は、遙なる青海原を、遠く見やれば、東の空より月皎々と上れり、あはれ、この月は、我が故國にて見なれたる、奈良の春日にある、三笠の山を出でし月なるかなとなり。ふりさけ見ればは、遠方を見渡す義なり。かもは感嘆の詞なり 〇事の心 歌の意なり 〇をここ文字 漢字を男文字といふ。こゝは歌の意を、漢譯して見

せたるなり 〇こゝのこゝは、つたへたる人 〇こゝのこゝは、日本語にて、こゝは、日本語を知れる通辯人なり 〇こゝろや得たりけん その歌の意わかりたりと見え、いたく、感嘆せりとなり 〇そのかみを想ひやりて 考證に、「そのかみを思ひやりて」とあるに、二つの意あるべし。一つには、仲麿のぬしの、もろこしにて、月を見て、青海原云々の歌をよみし時の事を思ひいで、二つには、都にて月など見たりしをりの事など思ひいでなるべし。さる證には、歌にも、都にて山のはに見しこはいへり」とあり。いづれにても聞ゆべし 〇都にて云々昔、都にありし頃は、山の邊よりいでたる月をみし事なれども、今は波の間よりいで、又、波の間に入る月を

見る事よごなり

〔二四〕 ○春の海に云々 春と秋とを對句にしたるは、文章のあやなり。しもは強めの詞なり ○おぼろげの願 おぼろげならぬといふべきを、ならぬを省きていへる此頃の俗語を以てかけるならん。一生懸命の願などいふほどの意なり ○つかはれんごて云々 紀氏につかはれんごて、従ひ來れる童ありごなり。その童は、女の童なるべし ○なほこそ云々 かやうに御供して來れるもの、我は、ナホ、ヤハリ、國の方が戀しく眺めらるゝごかな、それは、己が父母が、故郷にあるが故なりごなり、かへらやは、舟歌の柏子なれご、それに歸りたしごの意を含めたるごご、前の七日の條にもあり ○くろごり

和名抄に、鶺鴒は黒き色の水鳥なりごいへり。海邊に棲む鳥にて、今の黒亮ならんごいふ ○この詞なにごはなけれご云々 此の黒と白と對していへるは、何ごいふべきはごの詞にはあらねご、わざご、心ありていへるやうにて、なにごなく、風流めきて聞え、船頭の詞ごしては、身分に不似合なるにより、耳にごまれりごなり ○浪を見て 浪を見ておごろけるが上に、又、國より云々ごつゝけて、解すべし ○國よりはじめて はじめての下に今日までごいふ意を含めたり。土佐の國を出帆せし以來、今日までごいふ意なり

〔二五〕 ○海賊云々 紀氏在任の頃、前伊豫藤原純友、平將門ご、東西相應じて、帝都を窺はんごし、これに土佐

の海賊ども徒黨し、海上を横行せり。されば、紀氏しば
く之を追捕せられしかば、それをいきごほりて、此度
の歸路を要して、返報すべきよしを傳へ聞きて、日々そ
を案ずる上に、又、海のおそろしければ、其の心配にて、
頭髮俄かに、白髪になりはてたりとなり。憂にあへば、
白髪となるといふ諺あれば、かくいへるなり。○な、
そち、やそちは云々、七十路八十路は、七十八をいふ。
紀氏は、今年七十三四歳なれば、かくいはれたるなり。
かやうに白髪になれるを思へば、人間の老といふものは、
海の上にあるものなりと、この海路の苦痛を云へるな
り。○わがかみの云々、我髪の雪の如き白髪と、磯邊に
打ちよせて、碎くる白波と、いづれが白さのまされり

や、沖の島守よとなり。沖つ島守は、陸よりはるかにはな
れたる、島の中に、外賊なごの來らん時の、番人におか
るゝ人なり。つはのにて、沖の島守の義なり。○楫取い
へ、沖つ島守よといひかけたれど、その島守は、こゝに
居らねば、そこに居る楫取に向ひて、この答せよといふ
意なり。こは歌より直にいひつゞけたる短文なり。○よ
へのごまりより云々、昨夜の泊より、他の舟泊へ漕ぎ行
くごなり。泊の名をいはざるは、阿波の海中に泊られた
ればなり。○あやしき歌、その男の童のよみし歌は、あ
ごけなくして、歌さもいへぬやうなる歌の義なり。○漕
ぎて行く云々、かく漕ぎ渡る船の中より見れば、山も動
くやうに見ゆるを、かの峯に立てる松は、山の行くこも

知らずやあらんとなり。あしびきは山の枕詞なり
三六 ○海あらけ云々 あらけは浪の荒れ立つなり。雪
さいひ、花さいふは、皆、浪の形容なり ○浪このみ云
々 浪さばかり一言に云へど、その浪のほごばしる色
を見れば、雪と花との二つに混ふとなり ○海賊のおそ
り云々 おそりは、おそれの轉語なり。海賊のおそれ無
かれかしこ、神佛に祈るなど、女子としてかけるさまを、
あらはしたる注意想ふべし ○まここにやあらむ 實
なるか、いかかかしらぬがの意なり ○手向する所あり
手向は神前に幣帛を奉りて、道中の恙なからむことを
祈ることなり。出帆して漕ぎ來たる途中に、神に物を奉
るべき場所がありたりとなり ○楫取して云々 楫取に

命じて、幣帛をさし上げしめたるに、そのぬさ東の方へ
飛び散りたり。さて楫取の願言申して奉るには、この幣
帛の散る東の方へ、御船を速に漕がしめ給へとなり。た
むけは、手向くることにて、手に捧げて、幣物を供ふる
よりいふ詞なるべし。ぬさは、絹又は、布を小さく切り
て、それを袋に入れて携へつゝ、旅行の折に、道祖神又は、
海神に奉り、旅中の無難を祈るに用ひしものなり。ひ
むがしは、東にて、こは、ひむかしを約めていへるなり
三七 ○わたつみの云々 海上を守る神に、手向まるら
す幣の、東の方に吹きやる追風が、絶え止むことなく吹
けかし、かくて一日も早く都へ上りたしとなり。ちぶり
の神とは、道觸の神といふ義にて、陸にまれ、海にまれ、

すへて道行く人を、守り給ふ神をいふ。なんは願の意なり。○その音を聞きて云々。帆を引き上る音をきいて、小供も女も、いつか都へつかむ、早く坂京したしと思へばにやあらむ、舟がさく行くのを、甚しく悦ひ居るなり。さしのごは待つ意を強めしなり。○この中に云々。この悦べる小供や、女の中にさなり。たうめは老女の義にて、下文に淡路の巨子こある婦人と同じ人ならん。○追ひ風の云々。追風ふき來りて、かく舟を進ましむる時は、手拍子うちて、喜ぶほごに嬉しきなり。行くふねのは、帆にかゝる枕詞。ほでは拍子のさにて、ほは、又、帆にかけて詠みしなり。○ていけ。てけといふに全じく、天氣のさなり。

二八 ○かしこく歎く。かしこくは、甚しくの義にて、キツウ歎息することなり。○日をのぞめば都遠し云々。望日長安遠など朗吟する事のこゝろを、問へば、しかじかの故事によりて作れるなりと聞きてなり。さてこの故事は、明帝數歲、元帝抱置膝前。偶、長安使來、因問、汝謂日與長安孰遠。對曰、長安近、不聞人從日邊來。居然可知也。元帝異之、明日宴群僚。又問之、對曰、日近、元帝失色曰、何乃異間者之言。對曰、舉目則見日、不見長安。由是益奇之、晉書明帝紀に見えたり。○日をだにも云々。極めて遠き、天上にある日にも、すぐ天雲近く見らるゝものを、都へゆかんと思ふ道は、さてく遠き事であるかなとなり。○吹く風の云々。吹くことの止

む事のなき間は、波もやまず、さればその波路は、いよ
くはるけく、心細きことかなこの意なり。かぎりしの
は、強めの詞なり。○つまはじきして寝ぬ 爪弾は、
物を疎んじ、又、賤しみ嫌ふ時などにするわさなり。こ
の日、終日、風やまねば、そを恨みかこち、人々つまは
じきして、ねたりしなり。○うらく 長閑なること
○爪のいご長くなりたるを見て 昨日迄の風雨に引換
へ、今日は春めきて、うらくかなるに、心ものごやぎて、
爪の延びたるに氣つき、これをきらんとするなり。○
今日は子の日云々 日本紀纂疏に凡陰陽家丑日除手甲寅
日除足甲爲吉云々とありて、爪を切るに、日の吉凶をい
ふ事は、ふるくよりの習慣と見えたり。されば、子の日

に爪を切る事、必しも凶なるにあらねど、明日の丑の日
をまちて、切らんこの意なり
(三九) ○むつきなれば云々 正月なれば、今日は、末の
子の日なれど、なほ正月の中なれば、都の子の日のこと
を思ひ出し、正月の初子の日には、都の人々、野邊に出
で、小松を引く吉例なれば、小松もあれかしと云へど、
海の上なれば、小松を得ること難しとなり。○おば
つかな云々 けふは子の日なるか、子の日なれば、松を
引くべきに、小松などもなければ、詮なければ、漁人の
身にてもあらば、せめて海松の名にちなみ、みるにても
引くべきを、あはれ興のなきとかなと歎息せるなり。お
ほつかなは、覺束なしのしを省きたるにて、歎息の詞な

り。うみまつは海松と書きて、みるこいふ海草なり。○
 けふなれご云々。今日は子の日なれご、我漕ぎ渡る浦邊
 には、春日野もなければ、若菜も摘まずごなり。春日野
 は、奈良にありて、若菜に名高き野なり。こゝは、たゞ
 野こいひても、事たれご名所なれば、かくいふのみ。○
 土佐のごまり。阿波の國にありご云ふ。○むかし土佐こ
 いひける處に云々。以前、土佐こいふ處に住みたりし女
 が、この舟に乗り居て、其の人のいふには、むかし、暫
 時の間居たりし所の名ご、同じければ、昔を思ひ出し、
 甚なつかしくおぼゆごなり。こゝは、紀氏自身が、土佐
 の國守たりし事を、わざごかき亂したるなり。
 三〇〇 ○年ごろを云々。こゝは、數年間住居したりし所

の名をおひて、土佐こいへる故、昔をおもひ出し、舟に
 來寄せる浪までも、なつかしくおもふごなり。きよるは
 來寄るの義なり。名にしのは、強めの詞なり。○海賊
 夜ありき、云々。海賊は夜行せぬものなりご聞きて、夜半
 に、土佐の泊を漕ぎ出できご也。せざなりは、せざるな
 りの約語。みごは、水門にて、海水の出入る戸口をいふ。
 港ごも瀬戸ごもいふ。こゝは、阿波の鳴門をいへるな
 り。○からく。ひたすらなごいふに同じく、一生懸命に
 なり。○野島。沼島ごも、奴島ごも書く。淡路の海中に
 ある島なり。○田無川。和泉の田川にやあらんごの説あ
 れご、詳ならず。○和泉の灘。和泉の海邊なり。
 三〇一 ○海賊ものならず。今は和泉の國までつきたれば、

海賊も恐るゝに足らずとなり。○あしたのま 朝の間にて、午前をいふ ○黒崎の松原 和泉日根郡、淡輪村にありといふ ○蘇枋^{すか} 赤き色なり ○箱の浦 和泉の國、日根郡、箱作村なりといふ ○綱手 船にかけて引く綱をいふ。磯傳ひに挽き行くなり ○玉くしげ云々 玉くしげは、玉を以て飾れる櫛箱をいふなれど、こゝは、箱の浦の枕辭なり。歌の意は、風吹かずして、箱の浦に浪のなき日は、一面に平らかなる故、それを鏡とたれか見ざらん。たれも鏡のやうに見るならん ○人もいふことゝて 人も詠む歌なればとて、自らも氣ばらしに歌を詠めりとなり

三三二 ○ひく船の云々 今、船をひく綱の如く、なが

春の日なるに、その日を多く重ねて、四五十日の日數を、われは經たる事よとなり。はじめの二句は、長さ云はむために置ける序詞なり ○聞く人の云々 此の歌を聞く人の思ふやうには、何故にかゝる平凡なることを歌によむかこ、小さき聲にて、ひそくいふ様子なり。たゞ言は 世の常の平凡なる思想にて、文飾なき語の義なり ○得しもこそ云々 よくもかやうに誣言^{しやうごん}いひて、つまらぬなごゝいふ事なりと、口のなかにてつぶやきつゝ止みたりとなり ○緒をよりて云々 緒をばよりたりとて、其の甲斐もなきものは、その緒を以て、落ちつゝもる涙のしづくを、貫きこめぬがゆるなりとなり

三三三 ○この楫取は云々 元來、楫取は、おのが職分な

る、海上の天氣はよく知れるものなるに、この楫取は、
 をを知らずして、腹たゞしさのあまりに、かくのゝしり
 たるなり。かたるは、偏坐かたまの義にて、乞食、または、不
 具者なごをいふ語、又、轉じて、人を罵り呼ぶ稱にも用
 ふ。○このごまり云々、此の濱邊には、いろくくの貝石
 多ければ、皆おり立ちて拾へるを見て、我が兒も居らば、
 同じ様に拾はんものを、彼の母なごのよまれたるな
 り。昔の人ごは、土佐にて没したる彼の女兒のごごなり
 ○よする波云々、濱邊に打ち寄する浪よ、ねがはくは、
 忘れ貝を打ち寄せて呉れよ、ごかく死にたる女兒を思
 ひ出して困る故、若しその貝を拾はゞ、切なるおもひも、
 しばらくは忘るゝごごも得へしごの意なり。○ある人

紀氏を云ふ。紀氏も悲しみに堪へずして、船中の氣慰
 めによめりごなり。○わすれ貝云々、忘れ貝を拾ふごご
 をもすまじ、彼の忘れがたき白玉の子をば、戀ひ慕ふ我
 心をなりごも、せめて亡兒の形見ご思はむごなり。白玉
 ごは、子にたごへていへるなり。○をむなごのためには
 云々、亡兒を戀ひ慕ふためには、親も子めきて、おろか
 になりぬへしごなり
 三四 ○玉ならずもありけむ云々、亡兒を白玉なごにた
 ごへていはゞ、他人は、彼兒は玉の様に美しくもあらざ
 りしものを、笑ふならん。されど、昔より、死につる
 兒の顔は、好かりしなごいへば、玉ごいふごも、無理に
 はあらざるべし。○手をひぞへ云々、手をつけても、寒

むいといふ事もしらぬ、泉といふ名のつきたる國に、
 汲むといふ事もむくして、空しく日を重ねたりとなり。○
 小津のごまり 和泉の國、和泉の郡大津村にありといふ
 ○松原目もはるくとなり 小津の浦の松原は、見わた
 すかぎり、はるかに遠く見ゆるをいふ ○行けごなほ云
 々 行けごもく、なほ行き過ぐるごこの出来ぬは、此
 の岸の松原である。さても長きごこよごなり。いもがう
 むは、緒といふ語の枕辭なり。をは麻にて、女子の績む
 ものなればなり ○御船より仰せたふなり云々 御船よ
 りいそげご仰のくだりたるぞ、されば、朝の北風の吹き
 出でぬさきに、速に綱手をひけよご、船頭が船子ごもに
 命令せる詞なり

三五 ○楫ごりはうつたへに云々 楫取は、少しも自身
 に歌に似たるごこをいはんごせしにもあらず、これを聞
 ける人の、奇妙に歌のやうなる詞をいふものかなご云ひ
 て、試みに筆を取りて書きごめたるに、誠にや其詞の數、
 三十一字餘をなせりごなり。うつたへは、一向にの意
 なり ○祈りくる云々 波立つごこなく、船平らかなれ
 ご祈り來れる験しありて、やうく風の絶間になれりご
 思ふものを、あやにく鷗のやうなものまでも只白き波の
 やうに見ゆるごこかな。さてく意地のわるき事よごな
 り ○石津 和泉の國、大島郡にあり ○住吉のわたり
 今の攝津の住吉なり ○いま見てぞ云々 今、この住
 吉の松ご、我が身ごをくらへ見て、年老いたるを知れる

なり。松の色は若々しく見ゆるに、我が身は風波の憂目
を見たるために、一層年老いたるやうなりと、歎きてよ
める歌なり

〔三六〕 ○昔の人 昔の人にて、かの亡兒をさす ○住の
江に云々 船子よ、住吉の岸に船をさし寄せよ。この住
の江には、忘草といふ草があるといふが、果して名の如
く、亡兒のことを忘るゝ驗しありや、ためしに摘みて行
きたく思ふとなり ○ゆくりなく 不意なごの字をあつ。
思ひがけずになり ○しりへにしぞきにしぞき 後方
に退きに退きの意、しぞきは、しりぞきのりを省きたる
なり ○ほごしくしく 殆々しくにて、イマヌコニテ
なごいはんが如し ○打はめつべし はむは陥むにて、

海に打ちはまらんごすご也 ○例の神ぞかし いつもの
通り荒び給ふ神也 ○ごは今めくものか ごはごは楫取
のいふは、この意にて、今めくものかは、楫取の詞を評
したる作者の詞なり。今めくごは、當世風に似たるとい
ふことにて、神も今の世の、慾深き人情めきて、物ほし
がり給ふかご、滑稽に云へるなり ○ぬさには御心のゆ
かねば云々 幣を奉りても風波の歌まぬは、この幣帛に
は、神の御心が満足されぬ故に、御舟も進み行かぬご也
〔三七〕 ○まなこもこそ二つあれ云々 大切なる眼は二つ
あれど、これはたゞ一つの秘藏なる鏡なれど、残念なが
ら、神は奉らむとて、海に投じたりごなり ○うちつけ
に云々 うちつけは、急に、タ、ナニ、なごの意にて、

海は直に鏡の如く靜になれりとなり。○ちはやぶる云々
 千早振は、逸速いひまぶるの約にて、神の冠詞なり、一首の
 意は、いちはやく荒ぶる神の心を、風浪あらき海に鏡を
 抛げ入れて、靜まるか、靜まらざるかを、試み見たる事
 よとなり。○いたく云々 住の江といへば、住の江の忘
 草、岸の姫松など歌によみて、やさしき様に人はいへど、
 なかく、左様にはあらで、かく寶験いちじるしく、畏
 れかしこむべき、御神にておはすとなり。○目もうつら
 く、云々、さらく、照る鏡の光に、目のまばゆさか如
 く、明かに神の慾ふかき御心を見たりとなり。○みをつ
 くし、漂標たづなさかけり、水の深淺を測る爲に立てたる標木
 なり。○河尻 河口といふに同じ。淀川の流れて海に入

るところなり

〔三八〕 いつしか云々 いつしかとおもひて待遠しかりし
 難波瀉に、芦をこぎのけて、御舟が來たワイ、さてもう
 れしき事よとなり。いぶせかりつるは、心もさなく、待
 ちごほに思ふ事。あしこぎをけては、芦を漕ぎ退けてな
 り。○こちこちしき人云々 武骨なる人にて、歌よむこ
 こなどは知らぬ人なり。かうやうの事は、かうやの事に
 て、歌なごよむこをいふ
 〔三九〕 ○きこきては云々 來て見れば、淀川の堀江の水
 が淺さに 舟もこゝこほりて進まず、我身も、病にて心
 持わろく、うち臥して居る事よとなり。きこきてはこは、
 來へまかぎり來つめての意なり、水をあさみは、水の

淺きに因りての意なり ○ひごうたに云々 一首の歌にては、飽き足らねば、なほ一首よみたりとなり ○ごくご思ふ云々 一時もはやく都へゆきたしご思ふに、かく我船を惱ませて、進行を妨ぐるは、我がためを思ひてくれる、川水の心も深からぬゆるなりとなり ○淡路のごの云々 御は婦人の尊稱なり。折角よみ出でたれど、淡路の老女の歌よりは、かく下手に出来る事を、前より知らば、ねたき事のなきやう、はじめより、歌をよまずに居るへかりしを後悔しがりつゝ、奥の方に入りて寝たりと也 ○鳥養の御牧 攝津の國、島下郡にありて、昔、馬を放飼せし牧なり

〔四〇〕 ○例の病 持病の事なり ○或人いさゝかなるも

の云々 このあたりの知人 紀氏のかへれるをきゝて、僅なる物を贈れるなり。物とは 大やうにさす詞にて、こゝのは魚類なるべし。米してこは、米を以て返禮せしなり ○いひぼしても釣るこかや いひぼは飯粒なり、飯粒にて鯛を釣ると云ふに同じやうこの意なり ○せちみ 前に云へり ○あけぬから 明けぬうちから云ふ意なり ○和田のごまり 鳥養と渚との間にあれば、今の牧方あたりなるべし ○あがれのところ あがれは、別る放るなどの古言にて、旅客のわかるゝ驛場をいへるなるべし ○渚の院 河内の國交野郡にあり。この院は、文徳天皇の離宮なりしなり ○惟高の親王 文徳天皇第一の御子にして、御位に即かせ給ふへかりしを、良房

大臣の女の御腹に、惟仁親王うまれ給ひしかば、惟高親王は、渚の院に避け給ひし事歴史に見えたり。在原業平は、常にこの院に参りて、御物語せしこと、伊勢物語にも見るたり

〔四二〕 ○世の中に云々 若しこの世の中に、櫻の花こいふものがなかりしならば、散るこいふ心配もなくて、人の心は、誠に長閑なるべきに、この花があるによりて、風に雨に心を惱すこと多く、心せわしければ、寧ろ花こいふものなからんには、斯る心配もなかるべしと、深く櫻を愛するあまりに詠める歌なり ○興ある人 風流心のある人と云ふ意にて、紀氏自身をいへるなり ○千世へたる云々 千年も万年も経たるころの松なれども、

昔のまゝに、松吹く風の寒きことは、今も變らざることよこなり ○君こひて云々 住み給ひし惟高親王を戀慕ひつゝ、數年を経たるこの院の梅花は、昔ながらに香に匂へりこなり ○みな人云々 船中の人々、始め京より土佐に下りし時には、大方、小供はなかりしに、土佐の國にて子を生める者が、この船にまじり居れりこなり

〔四三〕 ○なかりしも云々 子のなかりし人も、子もちになりて歸り來るが多きに、われは始めありしにかゝはず、今はなくて歸るがかなしとあり ○かやうのこと云々 すべて詩や歌こいふものは、唐土にても、我が國にても、情にせまりて詠めるものにて、歌をこのめばとて詠むにはあらざるべし ○宇土野 攝津の島上郡にあり

こいふ ○山のよこをれる 山の横はれるを云ふ ○八幡の宮 男山石清水の八幡宮なり ○山崎の橋 山城の國、乙訓郡にあり。行基菩薩のつくれるものなりこいふ ○相應寺 山崎の橋際にあり。權僧正壹演の開基せる寺なり

〔四三〕 さだむるごころあり いろくご相談することなり ○さゞれなみ云々 さゞれなみは、さゞなみともいふ。あやは文にて、波紋を衣の綾に見なせるなり。一首の意は 小波か打が寄せてつくれる水の文は、水にうつれる柳の影の細き枝の糸を以て、織が如く見ゆるごなり ○車ゐてきたれり 車率て來たりにて、持ち來れりごなり ○あるじ 饗應の事なり ○うたて思ほゆ 禮を

盡して饗應せるが、意外に思はるごなり ○るやゝか なり ろやは、禮にて、やかは、其様子を云ふ。禮儀のたゞしき様をいへるなり

〔四四〕 ○山崎のたなゝる云々 たなは店にて、小櫃は、今の繪櫃なるべし ○まがりの法螺のかた まかりは勾餅の略語なり。米、麥などの粉を餡などに和してつくれる、當時の菓子的一种なり。法螺貝の形をなせり ○鳥坂 山城の國、乙訓郡、石塔寺の南にあり ○立ちて往きしごさより云々 國司になりて出立せし時よりは、歸り來る時に、人は利徳を願ひて、ごやかくと、誂ひくる事よごなり ○飛鳥川にもあらねば云々 古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川さのふの淵はけふの瀬ごなるご

いふ歌あるによる詞なり ○久かたの云々 桂川の水も、其水の底に影れる月かげも、昔のまゝにて、變れる事なしとの意なり

〔四五〕 ○あまぐもの云々 あまぐものは、はるか枕辭、ひせゝは、ひたしてにて、ぬらすを云ふ。一首の意は、土佐の國よりは、天雲の如く、遙かに思ひ居りしこの桂川を、けふは、其の水に袖をぬらす程近づきて、涉りたる事よとなり ○桂川云々 桂川の水は、自身の心に似通ひて、同じ思ひにはあらざれども、都に入る我が心の嬉ささ、同じ深さに流るゝやうとなり ○中垣 隣家の境の垣なり。この家を預りたるは、隣家の賤士なるへさに、紀氏の家さ、垣を一重へだてたるばかりなれば、一

軒の家の様なる故、御預り申さんとのぞみて、親切にいひたれば預けたるなり

〔四六〕 ○いとはつらく見ゆれど云々 誠に不親切なる仕方とは思へど、留守中の返禮はする積との意なり ○池めいて云々 めいは、めきの音便にて、らしきの意、池の如く底くなりて、水の溜りたる處ありとなり ○いかゝはかなしき どの位さいひて、はかられぬほど悲しこの意なり ○船人ども皆子いだきて云々 同船せる屬官ごもなど、皆子を抱きて、さわぎ悦べるとなり ○心しれる人 紀氏夫婦、互に亡き子を思ひて、其悲しみをかたれるなり ○うまれしも云々 こゝで生れし子は歸らぬものを、我が家にもごなかりし小松が生ひ出でたるを

見れば、子供のこころを思ひ出して悲しとなり
 〔四七〕 ○見し人を云々 見し人とは亡兒を云ふ。遠く悲
 しきは、生死の別れをいへるなれど、この中に、土佐の
 國に葬りおきて、歸れる事をも含めたるなり。一首の意
 は、昔見し、我が女の子を、この松の千年もさかゆる如
 くに見るこころが出来たらんには、かく遠く悲しき別れは
 すまじきものをこなり ○忘れがたく云々 亡兒の事を
 はじめ、家の荒れたる様などを見て、忘れがたくやし
 き事ども多くあれど、こゝにくはしく記すこころを得ず、
 それはどうでも、かうでも、この書きたるものは、早く
 やぶり捨て人目にふれぬ様にすべき事なりと、紀氏の謙
 遜の詞なり。

土佐日記讀本附註解 終

博得博士イーストローラー著
 改訂増補
英和會話獨修 全二冊
 拾版
 三十五頁 正價五拾五錢 郵税四錢
 特別金文字入正價五拾五錢 郵税六錢
 英語研究會編纂 島村東洋

最新日英書翰文 全二冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 小林學堂著

刑訴訴訟法註釋大全 全一冊
 正價六十五錢 小包五拾錢
 法學研究會編纂主任法學士秋野沈

文官普通及試験問題解答 全一冊
 正價八拾五錢 郵税八錢
 森田直道著

入學豫習書
 幼中學校 正價五錢 郵税四錢
 高等女學校 正價五錢 郵税四錢

官立入學試験問題
 附一、州二、附三、附四、附五、附六、附七
 附八、附九、四十年以下各年度發行
 正價各拾五錢 郵税四錢宛

帝國大學教授法博士和田雄三著
和英新辭典 全
 正價八拾五錢 郵税六錢
 英文學の標準として其名稱れなき和田雄三博士
 が多年の経験に基き此の會話作文の料に實
 せんか爲めに多大の苦心を以て編せられたる
 ものにして一度本冊を手にしたまは、會話に
 作文に金玉の美文直ちに平直な語目を對
 いて出で來り人此書を讀みの應有に推し進
 りに當り博士の心血をそそぐ多年磨ける此
 一冊の白玉の彼の集たる功に涙を流する辭
 典の類の中にあり知に堪へたる光を放つ
 を見たまへ。

官立入學試験問題答案
 附六年度、附七、附八、附九、四十年以下
 正價各拾五錢 郵税六錢宛

官立入學試験問題講義
 附六年度、附七、附八、附九、四十年以下
 正價各拾五錢 郵税六錢宛

日本六法全書 全二冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 ◎國ローヌ金文字入與本
 ◎正價五拾五錢 郵税六錢

日本六法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

民法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

小松學堂編
法規全書 全二冊
 附三、附四、附五、正價六拾五錢 小包八拾
 北川三友附生編 拾七、附八、附九、正價六拾五錢 小包八拾

民法戶籍法問答講義 全一冊
 正價六拾五錢 郵税六錢
 橫濱國政統計調查本部編纂
 附三、附四、附五、正價六拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價六拾五錢 小包八拾

關稅法規類纂 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

法律顧問 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

料理理法全書 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

代數學講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

博得博士イーストローラー著
 改訂増補
英和會話獨修 全二冊
 拾版
 三十五頁 正價五拾五錢 郵税四錢
 特別金文字入正價五拾五錢 郵税六錢
 英語研究會編纂 島村東洋

最新日英書翰文 全二冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 小林學堂著

刑訴訴訟法註釋大全 全一冊
 正價六十五錢 小包五拾錢
 法學研究會編纂主任法學士秋野沈

文官普通及試験問題解答 全一冊
 正價八拾五錢 郵税八錢
 森田直道著

入學豫習書
 幼中學校 正價五錢 郵税四錢
 高等女學校 正價五錢 郵税四錢

官立入學試験問題
 附一、州二、附三、附四、附五、附六、附七
 附八、附九、四十年以下各年度發行
 正價各拾五錢 郵税四錢宛

日本六法註釋 全二冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

帝國憲法釋義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

法律文例 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

府縣制郡制釋義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

民法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

刑法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

法學通論 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

法學契約買賣作成案內合卷 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 法學士秋野沈著

帝國大學教授法博士和田雄三著
和英新辭典 全
 正價八拾五錢 郵税六錢
 英文學の標準として其名稱れなき和田雄三博士
 が多年の経験に基き此の會話作文の料に實
 せんか爲めに多大の苦心を以て編せられたる
 ものにして一度本冊を手にしたまは、會話に
 作文に金玉の美文直ちに平直な語目を對
 いて出で來り人此書を讀みの應有に推し進
 りに當り博士の心血をそそぐ多年磨ける此
 一冊の白玉の彼の集たる功に涙を流する辭
 典の類の中にあり知に堪へたる光を放つ
 を見たまへ。

官立入學試験問題答案
 附六年度、附七、附八、附九、四十年以下
 正價各拾五錢 郵税六錢宛

官立入學試験問題講義
 附六年度、附七、附八、附九、四十年以下
 正價各拾五錢 郵税六錢宛

日本六法全書 全二冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 ◎國ローヌ金文字入與本
 ◎正價五拾五錢 郵税六錢

日本六法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

民法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

刑法講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

法學通論 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

法學契約買賣作成案內合卷 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢

小松學堂編
法規全書 全二冊
 附三、附四、附五、正價六拾五錢 小包八拾
 北川三友附生編 拾七、附八、附九、正價六拾五錢 小包八拾

民法戶籍法問答講義 全一冊
 正價六拾五錢 郵税六錢
 橫濱國政統計調查本部編纂
 附三、附四、附五、正價六拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價六拾五錢 小包八拾

關稅法規類纂 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

法律顧問 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

料理理法全書 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

代數學講義 全一冊
 正價五拾五錢 郵税六錢
 附三、附四、附五、正價五拾五錢 小包八拾
 附六、附七、附八、附九、正價五拾五錢 小包八拾

代數學問題詳解 全三冊
 正價一圓各拾五錢宛 郵税各四錢宛
 白井義典著

平面幾何學問題詳解 全二冊
 正價一圓各拾五錢宛 郵税各四錢宛
 松本小七郎著

立體幾何學問題詳解 全一冊
 正價一圓各拾五錢宛 郵税四錢宛
 白井義典著

數學公式及原理 全一冊
 正價五拾五錢 郵税四錢
 白井義典著

代數學問題詳解 全三冊
 正價一圓各拾五錢宛 郵税各四錢宛
 白井義典著

平面幾何學問題詳解 全二冊
 正價一圓各拾五錢宛 郵税各四錢宛
 松本小七郎著

立體幾何學問題詳解 全一冊
 正價一圓各拾五錢宛 郵税四錢宛
 白井義典著

數學公式及原理 全一冊
 正價五拾五錢 郵税四錢
 白井義典著

英國 チャールズ・スミス氏原著
日本 上野 清 譯

新撰大代數學講義

全一冊 ○洋装命文字入 ○紙數一千五百頁
○正價壹圓五拾錢 ○小包金拾貳錢

現今代數學は數學全科目の大部分を占め、數學の知識及び應用は代數學に因るに至り、而して代數學中に於て最も正確に最も簡明に最も完全に新知識を得る最大便利の書は「チャールズ・スミス」氏の「大代數學」とす。故に現今中學卒業程度の學生或は數學研究者の爲めに世に行はる書は同氏の法式によらざるものなし。本書は講述者が多年の経験によりて「スミス」氏の最新版大代數學を增補講義せられたるものにして、一般受験生及び數學專門自修者の爲に代數學の要領を精細に講述し、原書の欠を補ひ且つ最初、代數學の精要を示したる故に原書の出版元倫敦「マクミラン」社を得て、廣く代數學の必要を世に知らしむるの便利を與へ、
「代數學講義」と題せり是れ講述者の自稱の
て本書を「新撰大
らざるなり。

文部省 檢定 試驗問題集

- 國語漢文
 - 家事裁縫
 - 圖畫
 - 外國語
 - 農
 - 植物生理
 - 物理化學
 - 歴史
 - 地理
 - 數學
 - 習字
 - 體操
 - 手工
 - 商業
 - 音樂
 - 教育
 - 修身
- 初回より十九回迄合本
以上七課目毎冊二十錢宛郵税二錢宛

物理計算及問題詳解

伴徳政先生著 正價卅五錢 郵税四錢

化學計算及問題詳解

伴徳政先生著 正價卅五錢 郵税四錢

平面三角問題詳解

松本小七郎著 正價卅五錢 郵税四錢

應川問盤 算術捷徑

正價金卅五錢 郵税四錢

通俗傳染病豫防書

日本醫學協會講師 岡田定治著 正價五十錢 郵税四錢

結核豫防書

傳染病研究所長醫學博士北里三郎 傳染病研究所部長醫學士柴山五郎作 通 郵税四錢

新撰洋装命文字入 價一圓八十錢 郵税十錢

婦人專門科、ト、宮田守治先生
中央看護學校校長松本安子先生

男女生殖健全法

醫學士丸山秀雄先生 東京板橋病院院長守田南洋先生 日本醫學協會講師岡田定治先生著 寄賣數個入正價金一圓十錢 郵税八錢

通俗衛生顧問

文學博士 中村正直博士 上製命文字入金九十五錢 郵税八錢

西國立志編

文學博士 中村正直博士 正價卅五錢 郵税六錢

商業百話

立志成功 正價卅五錢 郵税六錢

文章軌範

河村定輝校訂 正價卅五錢 郵税六錢

附、作者小傳

正價一冊十五錢宛 郵税一冊四錢宛 文學博士 高田早苗 文學士 山田龍雄著

日本民法註釋

小林學堂著 價四拾錢 郵税六錢

日本新刑法註釋

法學士飯野龍一著 價四拾錢 郵税六錢

刑事訴訟法註釋

酒井勉著 價四拾錢 郵税六錢

民事訴訟法註釋

價四拾錢 郵税六錢

英語獨學

外國語專攻山岡秀岳著 三ヶ月 價五錢宛 郵税四錢宛 全三冊

肺病 自宅療法

花柳病 一トラキーム 價五錢宛 郵税四錢宛

文章資料

東京研學會編 正價卅五錢 郵税六錢

作文錦囊

正價卅五錢 郵税六錢

圖畫速寫法

竹下高次郎著 符號并圖畫法凡そ千個 正價四十錢 郵税四錢

用器畫法

中等教育 上卷圖式解説 二冊正價六十錢 小包十錢 下卷詳法二冊正價六十錢 山田武雄作

音樂獨習全書

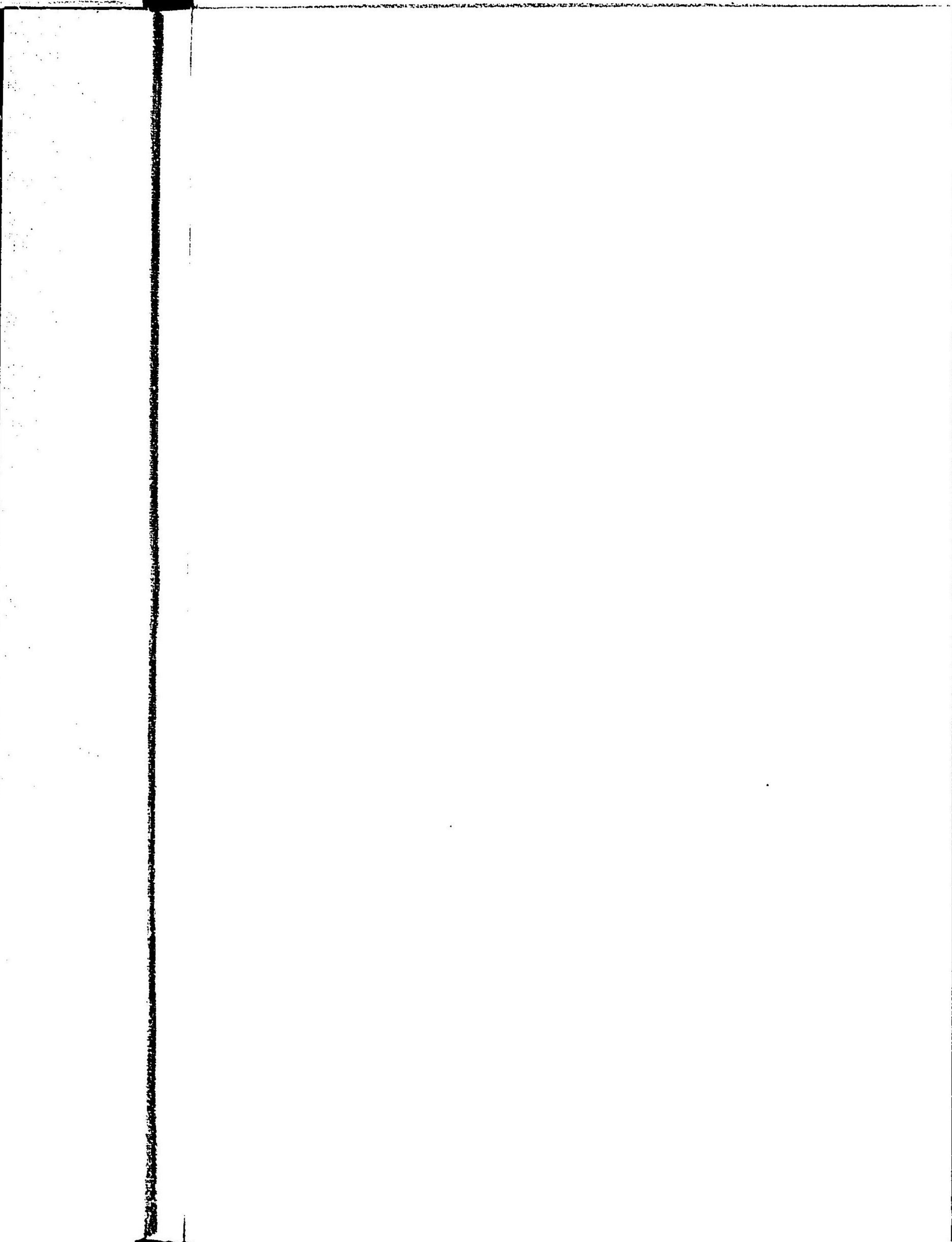
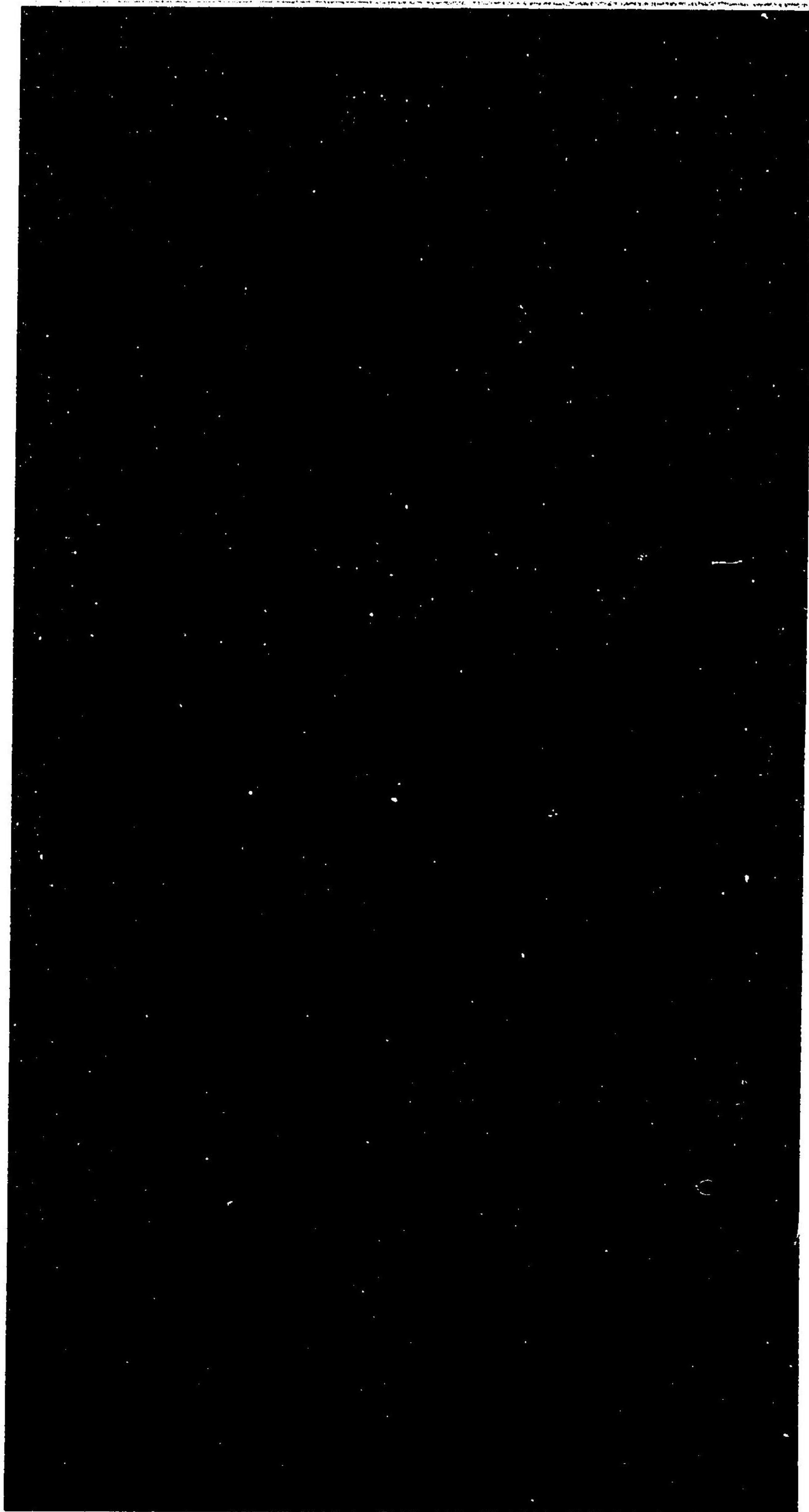
一冊正價卅錢宛 郵税四錢宛

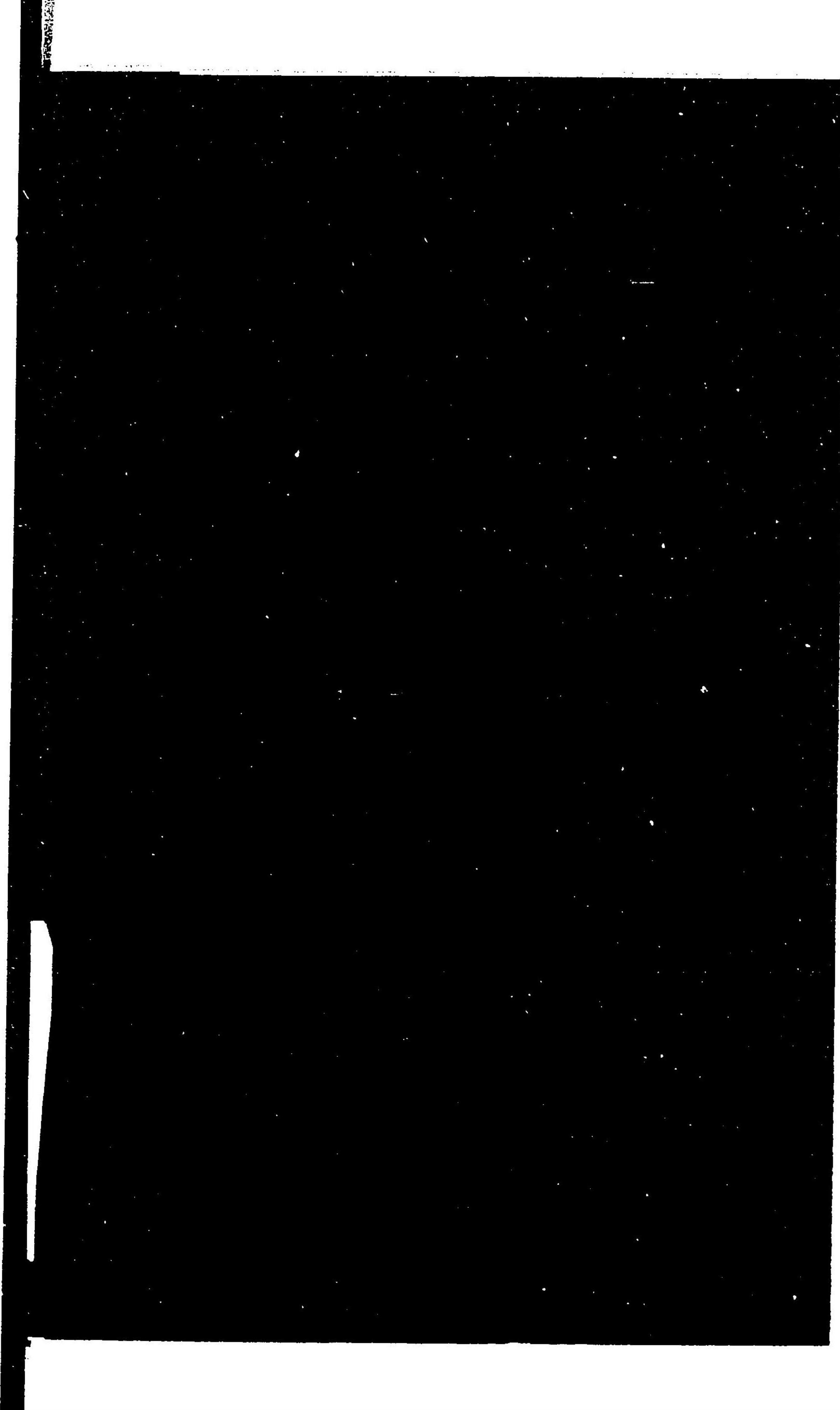
尺八

吹尺八 價五錢宛 郵税四錢宛

尺八

吹尺八 價五錢宛 郵税四錢宛





78
92

095874-000-3

78-92

土佐日記読本 附, 註解

篠田 真道/註解

M42

DBR-0089



